

美里町文化財調査報告書第4集

# 成 田 遺 跡

平成20年3月

宮城県美里町教育委員会

# 成 田 遺 跡

## 序 文

美里町には豊かな自然のなか、国指定史跡「山前遺跡」、町指定民俗文化財「関根神楽」などをはじめとした歴史遺産が数多く存在し、大切に守り伝えられてきました。特に埋蔵文化財については縄文時代から近世に至るまでのおよそ50箇所の存在が知られ、この埋蔵文化財から連綿と続く地域の人間活動の歴史を知ることができます。これら文化遺産は町民はもとより国民共有の貴重な財産であり、次世代に継承していくことが今に生きる我々の重大な責務であります。

しかしながら、人間の生活様式や活動範囲が時代の変遷とともに変化するのに伴い、文化遺産を取り巻く現状も変化してきました。特に埋蔵文化財は土地との結びつきが強いことから、年々激化する大規模な土地区画整理や個人住宅建設などの各種開発事業のために、破壊・消滅の危機に晒されることが多くなっております。

このような中、当教育委員会では、関係開発機関との十分な協議を重ね、貴重な埋蔵文化財を調査・保存し、積極的な保護に努めるとともに、その成果を生涯学習などで活用することで、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は、県営経営体育成基盤整備事業中坪西部地区のは場整備事業に伴い平成18年に実施した成田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。これら成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

このたびの調査にあたりまして、宮城県教育庁文化財保護課には職員の派遣等、絶大なるご指導、ご支援を頂きましたこと、改めて心から感謝申し上げます。また、現地で調査作業に当たられた方々、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。ここに関係各位に対して慎んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願い申し上げる次第です。

平成20年3月

美里町教育委員会

教育長 宮 嶋 健

## 例　　言

1. 本書は、美里町中坪西部地区の県営は場整備事業に伴う「成田遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は美里町教育委員会（確認調査は宮城県教育委員会）が主体となり、美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および本報告書の作成に当たっては、各関係者および以下の方々からご協力・ご教示をいただいた（敬称略）。  
吾妻俊典（名取高校）　車田敦（大崎市教育委員会）　古川一明（宮城県多賀城跡調査研究所）
4. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺＝1/25,000の地形図を複製して作成した。
5. 本書における土色の記述については、「新版 標準土色帖 1994年版」（小山・竹原 1994）を用いている。
6. 測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。
7. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。  
SD：方形周溝跡・溝跡　SE：井戸跡　SK：墓壙・土坑　SX：湿地・その他
8. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、岩瀬竜也（美里町教育委員会）、佐久間光平（宮城県教育委員会）が執筆・編集した。
9. 発掘調査の記録や出土遺物は美里町教育委員会が一括して保管している。

## 調　　査　要　項

遺　　跡　名：成田遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：39051　遺跡記号：R N）

所　　在　地：宮城県遠田郡美里町中坪字成田

調　　査　原　因：県営は場整備事業

調　　査　主　体：美里町教育委員会

調　　査　担　当：美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課

確　　認　調　　査　（県主体）：（県）佐藤則之　須田良平　千葉直樹  
(町) 岩瀬竜也

本　　調　　査：(町) 岩瀬竜也

(県) 佐藤則之　須田良平　佐久間光平　佐藤貴志

調　　査　期　間：確認調査：平成17年10月31日～11月2日

本　　調　　査：平成18年8月28日～11月21日

調　　査　面　積：確認調査：700m<sup>2</sup>　　本　　調　　査：2,800m<sup>2</sup>

調　　査　協　力：宮城県大崎地方振興事務所

# 目 次

## 序 文

例 言・調査要項

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	3
第Ⅲ章 発掘調査	4
1. 確認調査について	4
2. 本調査の方法と経過	4
3. 基本層序	7
4. 検出遺構と遺物	8
(1) 古墳時代（前期）	8
1) 検出状況	8
2) 遺構と遺物	8
A. 方形周溝跡 B. 溝跡 C. 溝状遺構 D. 土坑 E. 濡地（遺物包含層）	
F. その他の出土遺物	
(2) 中世	25
1) 検出状況	25
2) 遺構と遺物	27
Δ. 溝跡	
(3) 近世・近代以降	28
1) 検出状況	28
2) 遺構と遺物	28
A. 捩立柱建物跡 B. 大溝跡・溝跡 C. 井戸跡 D. 墓塙 E. 土坑	
(4) その他	30
第Ⅳ章 総 括	31
1. 古墳時代（前期）	31
2. 中世	35
3. 近世・近代以降	35

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

宮城県は旧小牛田町（美里町）および旧古川市（大崎市）の中埼西部地区において、耕地の汎用化や農地利用集積に対応していくため、生産基盤の整備を行うこととなった。これを受け、平成10年3月に県文化財保護課と旧小牛田町（美里町）教育委員会は当該地区的分布調査をおこなった。その結果、旧古川市長岡針遺跡の南に隣接する旧小牛田町側の耕作地で遺物が採集され、さらに南へ遺跡が広がることが判明したことから、長岡針遺跡の南側（旧小牛田町）の遺跡範囲を新たに「成田遺跡」として登録することとなった。

平成11年に「中埠西部地区は場整備事業区画整理計画」が採択され、その後平成17年には旧宮城県古川地方振興事務所（大崎市地方振興事務所）から遺跡との関わりについて協議書が提出された。これを受け、平成17年6月15日に県文化財保護課・旧小牛田町教育委員会・旧古川市教育委員会・旧宮城県古川地方振興事務所の4者が協議を行い、「成田遺跡」（旧小牛田町）・長岡針造跡（旧古川市）の範囲や遺構の分布状況を把握するため、確認調査を実施することとなった。平成17年10月24日～10月26日には県文化財保護課が確認調査を行い、古墳時代の溝跡や土器類などの遺物を検出した。このため再度協議を行い、一部については計画変更により現状保存す

こととなつたが、水路部分や新設道路部分については平成18年度に事前調査を実施することになった。事前調査は、南側の「成田遺跡」については美里町教育委員会、北側の「長岡針遺跡」については大崎市教育委員会が主体で実施することとなつた。

こうした経緯を経て、平成18年8月28日～11月21日の間、県文化財保護課の協力の下、美里町教育委員会が担当して成田遺跡の本調査を実施した。



第1図 成田遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の概要

## 1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県遠田郡美里町（平成18年1月1日、旧小牛町と旧南郷町が合併）は、仙台市から北東に約40km離れた県北中央部に位置し、地理的には江合川や鳴瀬川が流れる大崎平野東縁部にある（第1図）。南には大松沢丘陵、北には清滝丘陵、篠丘丘陵が西から東へ延びており、これらの間を江合川と鳴瀬川が東流する。両河川の間には標高15~30mほどの低丘陵が残っており、また、両河川沿いと低地内には東西あるいは北西-南東方向に延びる自然堤防が発達している。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	成田・無間野遺跡	自然堤防	集落・城柵地	神文・古墳前・奈良・平安・中世・古墳	10	神明道路	自然堤防	集落地	古代
2	の堀道跡	自然堤防	敷石道	古代	11	山山西渡跡	自然堤防	敷石地	神文施
3	行跡尾跡跡	自然堤防	敷石道	古代	21	田舎小学校遺跡	自然堤防	敷石地	神文施
4	山上遺跡	自然堤防	敷石道	古代	22	細子山遺跡	自然堤防	敷石地	神文施・古墳後・古代
5	中田遺跡	自然堤防	敷石地	古代	23	通川山遺跡	自然堤防	敷石地	平安
6	町造跡	自然堤防	敷石地	古代	24	通川中村遺跡	津張地	敷石地	古代
7	十二神道跡	自然堤防	敷石地	古代	25	通水城跡	自然堤防	城跡	中世
8	練衣川遺跡	自然堤防	敷石地	古代	26	利田瀬跡	丘陵	城跡	古代
9	上坪道跡	自然堤防	敷石地	古代	27	笛谷遺跡	自然道跡	荒地	古墳前・中
10	圓弧遺跡	自然堤防	敷石地	古墳中	28	日向削渕穴墓群	丘陵地	噴穴墓	古墳・平安
11	御劍跡	自然堤防	城跡	中世	29	奥水張穴墓群	丘陵	噴穴墓	古墳
12	休場跡跡	自然堤防	城跡	中世	30	笛音道跡	丘陵	喷石地	古代
13	脇舟道路	自然堤防	敷石地	古代	31	山川遺跡	丘陵	喷石地	古代
14	馬鹿丘遺跡	自然堤防	敷石地	古代	32	北九分渡跡	丘陵・河岸	喷石地	神文施
15	馬鹿丘・東駒ヶ淵跡	自然堤防	城跡・敷石地	古代・中世	33	施家山遺跡	丘陵	喷石地	古代
16	李坪城跡	自然堤防	城跡	中世	34	尼木船跡	丘陵	城跡	中世
17	谷地城跡	自然堤防	城跡	中世	35	天神山遺跡	丘陵	喷石地	古代
18	忘令寺跡	自然堤防	寺院		36	天神山西側穴墓群	丘陵地	喷石墓	古墳後

第2図 成田遺跡の位置と周辺の遺跡

成田遺跡は遠田郡美里町中坪字成田に所在し、美里町役場の北西約7kmに位置する（第2図）。この成田地区は美里町の北西端にあたり、北は大崎市古川長岡針地区に、南は同じく大崎市古川馬橋・上坪地区に接する。その大部分は江合川と田尻川に挟まれた沖積地で、平坦な水田地帯の中に集落が点在する標高16~17mほどの自然堤防が形成されている。成田遺跡はこの自然堤防上に広がっているが、第2図に示したように遺跡の北は大崎市側へと延びており、北側は長岡針遺跡（大崎市）として登録されている（註1）。成田遺跡と長岡針遺跡を合わせた遺跡範囲は東西約300m、南北約400mほどの広がりを持つ。遺跡は「古代の散布地」として登録されているが、これまで本格的な発掘調査はなされていない。

註1. 美里町の「成田遺跡」と大崎市の「長岡針遺跡」は行政上の境界で区分されているだけで、地形的には同じ自然堤防上にあることから、遺跡としては一連のものと考えられる。

## 2. 周辺の遺跡

成田遺跡周辺では、江合川流域の自然堤防上に遺跡がいくつか点在するものの、その分布は希薄である。調査された遺跡もほとんどなく、遺跡の詳細については不明なものが多い。ただ、北方約2~3kmの田尻川流域の自然堤防上や丘陵およびその縁辺部には遺跡が比較的多く、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世などの遺跡が分布しており、特に古墳~奈良・平安時代の遺跡が目立っている（第2図）。

古墳時代の遺跡をみると、江合川や田尻川の自然堤防上には北約2kmに前期のお椀子山遺跡(22)、西約2.5kmには中期の測尻遺跡(10)、江合川を挟んで南西約3.5kmには前~中期の留沼遺跡(27)などの遺跡がある。留沼遺跡では前期の竪穴住居跡、前期~中期の水田跡などが検出され、当該期の居住域と生産域が確認された遺跡として注目されている（宮城県教育委員会 1980a、古川市教育委員会 1999）。一方、北方の丘陵縁辺部には、前期古墳の周溝とみられる大溝跡が確認された新田柵跡(26:田尻町教育委員会 2001)、また、後期の日向横穴墓群(28:宮城県教育委員会 1981b)、筒水横穴墓群(29)、天神西横穴墓群(36)などが分布する。大溝に区画された前期の集落跡として著名な美里町の国史跡「山前遺跡」（小牛田町教育委員会 1976）は、本遺跡から南東へ約7kmの低丘陵上に所在する。

古代の遺跡では、江合川流域の自然堤防上に的場遺跡(2)、谷陽院遺跡(3)、山王遺跡(4)、田尻川流域の自然堤防上に神明遺跡(19)、通木山崎遺跡(23)などがみられる。北方の丘陵上やその縁辺部には古代の城柵跡として知られている新田柵跡(26)、城柵・官衙関連遺跡の権現山遺跡(33)、集落跡とみられる諫訪遺跡(31)、宮沼遺跡(30)、天神山遺跡(35)などがある。

中世では、自然堤防上や丘陵上に御館跡(11)、馬放館跡(15)、李坪城跡(16)、沼木館跡(34)などの城館跡が点在している。

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 1. 確認調査について

確認調査は、宮城県教育委員会が主体となって平成17年10月31日～11月2日に実施した。新設予定の水路・道路区域を中心に49トレンチを設定（一部に長岡針遺跡含む）し、遺構や遺物の分布状況を確認した（第3図）。その結果、おおよそA～C地点にわたって古墳時代前期および時期不明の遺構が点在し、また、土師器などの遺物が分布することが分かった。特に、三輪足神社の西側（A地点）や北側（C地点：長岡針遺跡）には古墳時代前期の遺物とともに溝跡や土坑などの遺構が分布しており、地形的にみても近辺に当該期の遺構群が広がる可能性が高いことが明らかになった。

遺構が検出された区域のうち、一部では切土が予定されており、遺構面まで工事深度が及ぶことが判明したが、A地点（今回の調査区のV区西側周辺）では水田面に盛上を行い、遺構面まで影響が及ばないように工事計画を変更することになった。

### 2. 本調査の方法と経過

調査対象となった区域は、主に新設道路・排水路設置区域および現道路の撤去区域である。「は場整備」工事の行程との関係から、発掘調査は3回（①I・II区、②III・IV区、③V区）に分けて実施することになった（第3図）。

第3図に示したように、調査区は細長く不整形で、調査も3回に分けて実施することになったことから、調査に際しては各区の両端に任意の基準点（BM1～BM8）を設置した。遺構が比較的多く分布するI区ではBM1・BM2、III・IV区ではBM5・BM6を結ぶ線を南北の基準線に設定して、南北の基準線およびこれと直交する東西軸をもとに3m方眼を組み、グリッドラインはI区：BM1、III・IV区：BM5をそれぞれ（0, 0）に設定して東西・南北方向の距離（N10、S10など）で表した。また、遺構が希薄なII・V区ではそれぞれBM3・BM4、BM7・BM8を基準とした。世界測地系にもとづく各基準点の座標値（平面直角座標第X系）は以下の通りである。

BM1 : X=-157,068.097 Y=15,322.552 BM2 : X=-157,000.411 Y=15,332.424

BM3 : X=-156,986.501 Y=15,326.925 BM4 : X=-156,932.585 Y=15,297.121

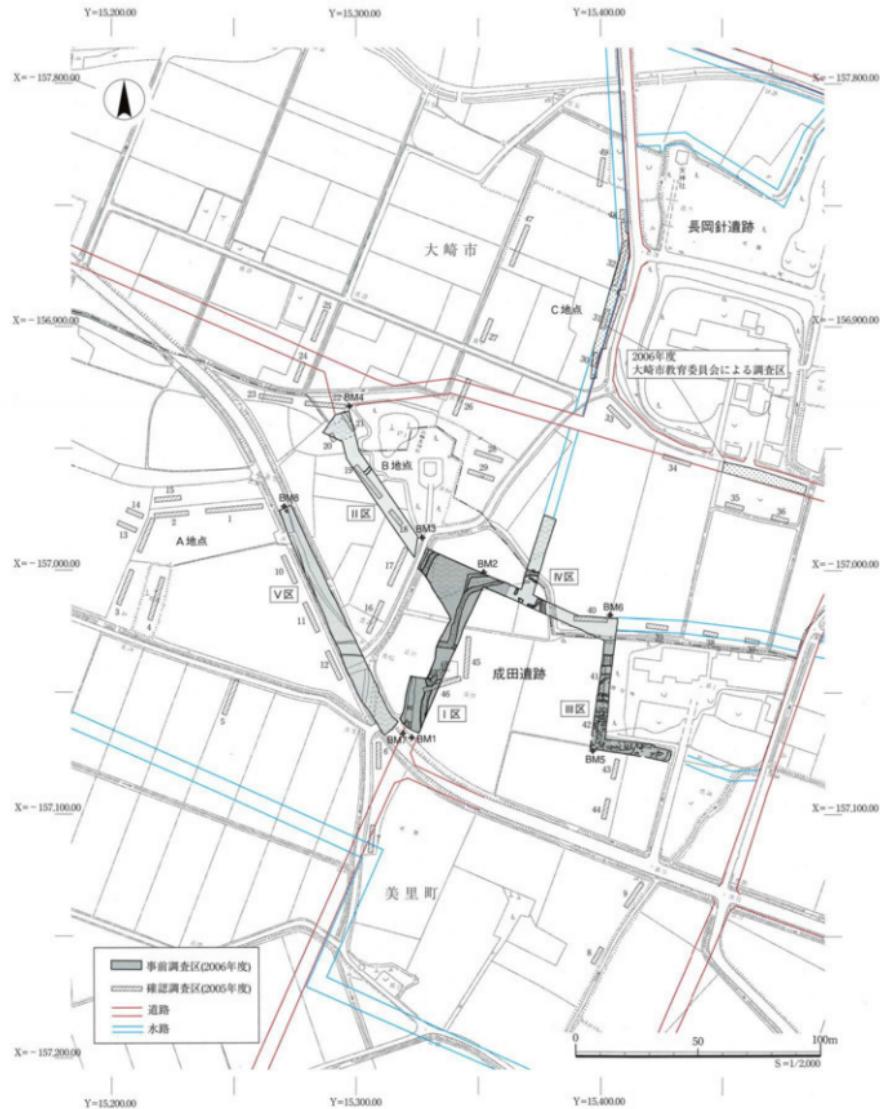
BM5 : X=-157,073.956 Y=15,396.749 BM6 : X=-157,018.341 Y=15,403.821

BM7 : X=-157,066.462 Y=15,319.015 BM8 : X=-156,974.978 Y=15,271.045

遺構の実測図は、平面図については縮尺=1/100および1/20、断面図については1/20で作成した。写真撮影には6×7サイズのモノクロおよびカラーフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を使用した。

発掘調査は、道路（一部排水路・切土部分あり）予定区域の①：I・II区、排水路予定区域の②：III・IV区、現道路撤去区域の③：V区の順で実施した。各区の調査の経過は以下のとおりである。

I・II区：8月28日～9月12日。I区は幅6m（一部10～20m）×長さ103m、面積874m<sup>2</sup>、II区は幅



第3図 調査区配置図

6 m（一部12m）×長さ66m、面積386m<sup>2</sup>である。I区では古墳時代前期の溝跡、湿地（遺物包含層）、中世の溝跡、近世の墓壙、時期不明の溝跡など、II区では古墳時代前期の溝状遺構、湿地（遺物包含層）を検出した。遺構の検出面はⅦ～Ⅸ層面である。I区の湿地西側にある南北方向の溝跡（SD09）からは古墳時代前期の塩釜式土器がややまとまって出土した。I・II区とも全体的にやや削平を受けている。湿地には“灰白色火山灰”が痕跡的に堆積していた。



写真1 調査状況（I区：SD09付近）



写真2 調査状況（I区：SD09）

III・IV区：10月3日～10月26日。III区は幅5m×長さ74m、面積366m<sup>2</sup>、IV区は幅5m×長さ80m、面積434m<sup>2</sup>である。III区では近世・近代以降の屋敷に関わるとみられる掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡など、IV区では古墳時代前期の方形周溝跡、土坑、I区から延びる中世の溝跡、ほかに時期不明の溝跡などを検出した。遺構の検出面はⅦ～Ⅸ層面である。IV区の北側にはI区から延びる湿地が広がることも判明した。

V区：11月16日～11月21日。調査区は幅6～8m×長さ102m、面積は734m<sup>2</sup>である。Ⅶ層～Ⅸ層面で、古墳時代前期の土坑、I区から延びているとみられる湿地、時期不明の溝跡を検出した。この調査区は現道路を撤去して水田化する区域であるが、工事深度が遺構面に影響を与えないことから、遺構の確認だけに留め、掘り下げ・精査は行っていない。



写真3 調査状況（IV区：SD12）



写真4 小牛田農林高校生徒来跡

### 3. 基本層序

調査区は標高16~17mほどの自然堤防上に位置している。現況では水田や畑地として利用されており、戦後の水田整備の際に削平や盛土などがなされて段状に平坦化されている。層序は調査地点によって若干の相違があるが（第4図）、概ね以下のようである。

I層：表土（主に耕作土）。層厚30~40cm。

II層：灰白色火山灰（10世紀前葉頃に降灰したと推定される火山灰：十和田a）。I・II・IV・V区の湿地に痕跡的に残存する。

III層：黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト。I・II・IV・V区の湿地に残存する。層厚5~6cmほどと薄い。微高地に分布する黒褐色シルト（III~IV層相当：10YR2/3）はIII区やV区西側付近においてのみ残存する。

IVa層：黒褐色（10YR3/2）シルト質粘土。III層に比べ褐色味がある。I・II・IV・V区の湿地に残存する。層厚は10~15cmほど。古墳時代前期の遺物を包含する。

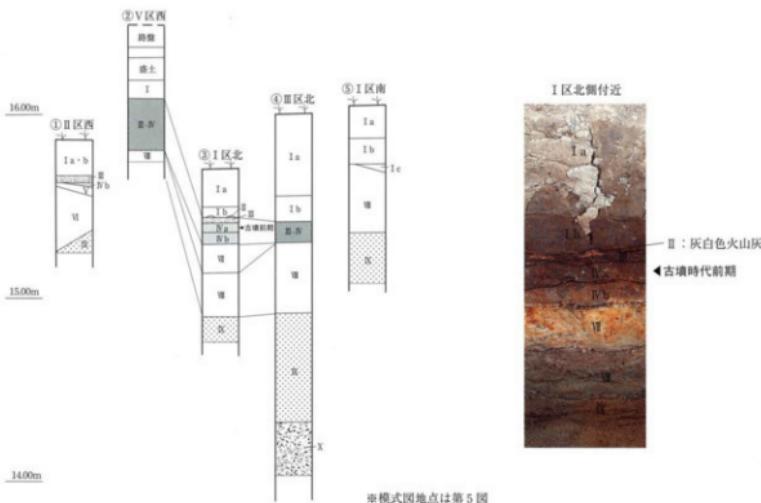
IVb層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト。やや灰色味を帯びる。I・II・IV・V区の湿地に残存する。

V層：にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト。II区西側にのみ分布する。

VI層：にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト。II区西側にのみ分布する。

VII層：明黄褐色（10YR7/6）粘土。主にI区以西に分布する。

VIII層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト。ほぼ調査区全域に分布する。



第4図 層序模式図

IX層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）細～粗砂。ほぼ調査区全域に分布するとみられる。

X層：黒色（2.5Y5/1）粘土。Ⅲ・Ⅳ区の溝跡の底面で確認したが、調査区全域に広がっているとみられる。

なお、XI層以下については未確認である。

#### 4. 検出遺構と遺物

検出遺構には、古墳時代前期の方形周溝跡1条、溝跡3条、溝状遺構1条、土坑2基、湿地、中世の溝跡2条、近世・近代以降の掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑などが多数ある。古墳時代前期の遺構はⅢ区以外の調査区からそれぞれ検出されているが、調査区の中央付近から西側にかけて散在するような状況である。また、近世・近代以降については東側のⅢ区に集中する（第5図）。

遺物はコンテナ13箱ほど出土している。大半は古墳時代前期の土器類であるが、他に中世陶器、近世陶磁器などがある。また、表土層などから縄文時代の遺物も若干数出土している。

以下、古墳時代から時期ごとに説明する。

##### (1) 古墳時代（前期）

###### 1) 検出状況（第5図、図版2～8）

当該期の遺構は、東側のⅢ区を除く各区域で検出されたが、その分布は全体的に希薄である。調査区の中央（I・IV・V区）と西端部（II区）には南北方向に広がる湿地（遺物を包含する）があり、これらの周辺の微高地付近から方形周溝跡1条、溝跡3条、溝状遺構1条、土坑2基が検出されている。遺物は方形周溝跡や溝跡、湿地から上師器類が比較的まとまって出土した。

###### 2) 遺構と遺物

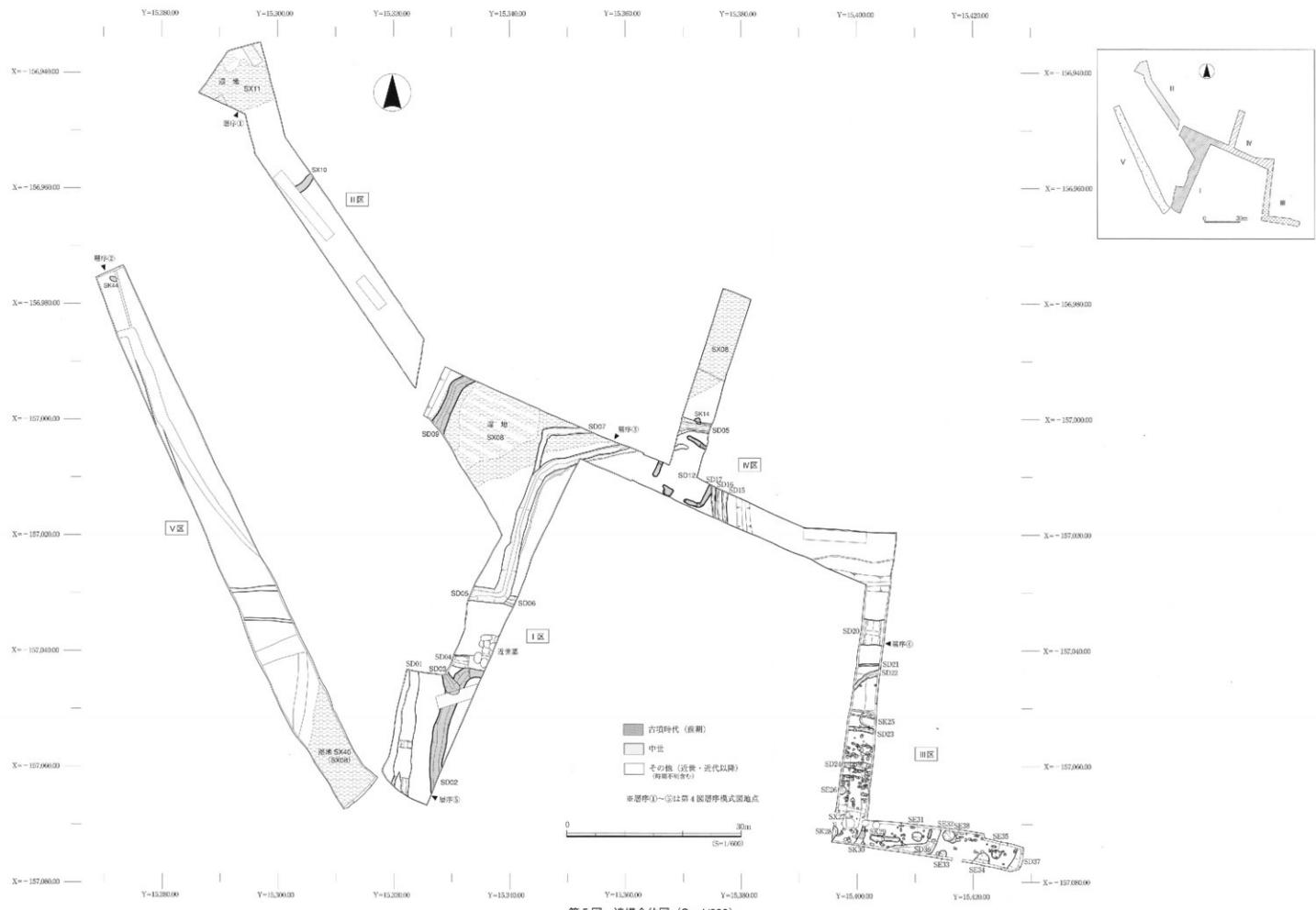
###### A. 方形周溝跡

###### 【SD12（SK13・19を含む）】（第6図～第9図、図版4・5・10・11）

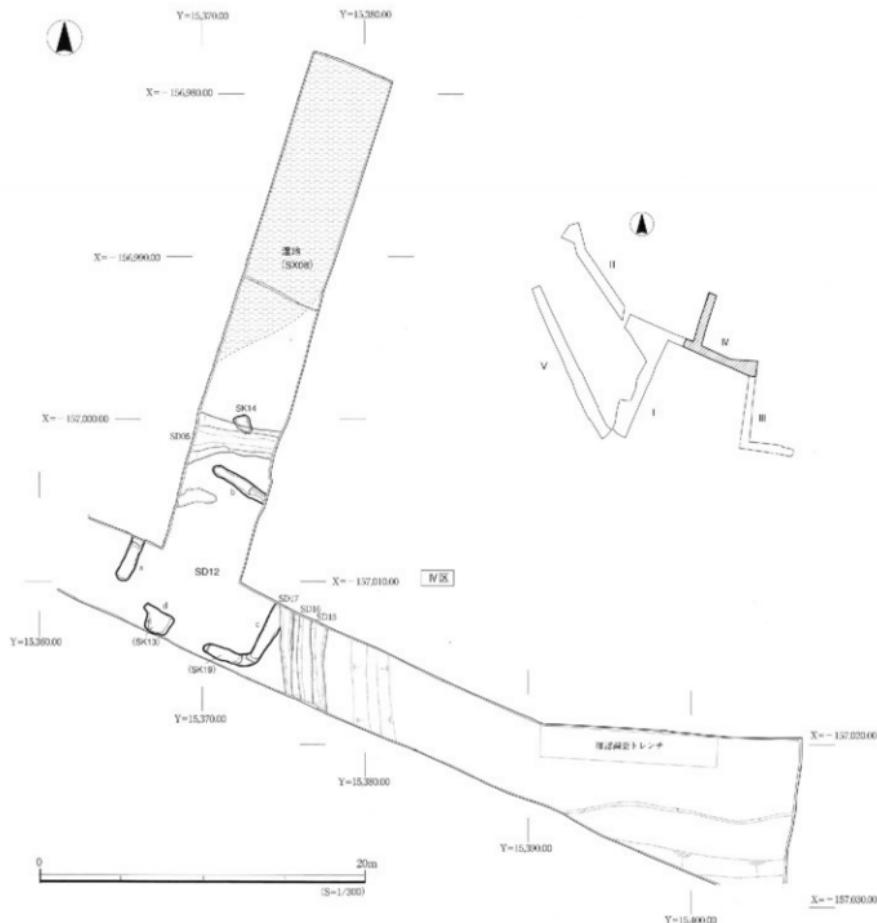
IV区中央付近に位置する。周溝跡は正方形形状を呈するが、連続せず部分的に途切れている。東辺はSD17溝跡に切られている。全体の規模は、周溝を含めた場合は東西10.6m・南北11.0m、周溝によって区画された内部は東西9.0m・南北8.9mほどである。区画内部では土坑や柱穴などの遺構、壁上の痕跡などは検出されてない。方向は、東辺でみると北で東へ約25° 傾する。

周溝は、西辺（SD12a）・北辺（SD12b）・東辺（SD12c）側では上幅が70～95cm、底面幅が45～75cm、深さは5～25cmほどで、南辺（SD12d：SK13）は不整な土坑状を呈し、大きさが東西2.0m・南北1.4m、深さは10～25cmである。SD12a～SD12cでは壁は概ね斜めに立ち上がり、断面形は浅いU字形を呈しているが、底面は平坦ではなく、それぞれ土坑状（隅丸方形）に窪む部分（SK19ほか）がある。土坑状に窪む部分は壁がほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。SD12d（SK13）の断面形も浅い箱形を呈する。

堆積土は6層に細分でき、概ね上位（堆1・2）は灰黄褐色・黒褐色シルト、中位（堆3）は地山



第5図 遺構全体図 (S=1/600)



第6図 古墳時代の遺構（IV区）

プロックを含むにぶい黄褐色シルト、下位（堆4・5）は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土で、底面には壁面からの崩落土（堆6）がある。ただし、土坑状に壅む部分はやや異なり、下部には人為的な埋土の可能性があるにぶい黄色シルト（堆①）や黒色粘土質シルト（堆②）などが認められ、また、SD12d（SK13）では中位に薄い炭化物層が堆積している。

遺物は、SD12a～cでは底面およびやや浮いたレベル（堆4～5）から、SD12dでは人為的な可能

性がある埋上の上部の堆積層（堆4）から、多くの土師器類がそれぞれまとまりをもって出土している（第7図・図版4・5）。また、SD12dからは鹿角（図版5-3）が出土している。土師器類には器台（第8図-1・2）・鉢（第8図-3～8）・壺（第8図-9・10）・有孔鉢（第8図-11）・壺（第8図-12～14、第9図-1～5）があり、他にミニチュア土器などが含まれている。赤彩土器の小片も若干数含まれている。第8図-1は器台脚部の破片資料であるが、透孔が3孔つくものである。第8図-3はいわゆる小型丸底鉢である。第8図-10の大型壺の肩部破片には、横位の平行沈線の間を斜格子状の沈線で埋めた文様が描かれている。第8図-11の有孔鉢は、体部に内側からあいた径2cmほどの孔が認められる。壺類は最も点数が多いが、いずれも器高が30cm以下とみられる中型品であり、大型品は含まれていない。なお、第9図-3と4は同一個体である可能性が高い。

## B. 溝跡

### 【SD02・03】（第10図・第11図・第13図、図版6・11）

いずれもI区南側に位置する。SD02溝跡は「」形に屈曲し、SD03溝跡はこのSD02に接続している。接点部分や堆積土の状況をみる限り、両者の新旧関係は認められず、これらは一連の溝跡とみられる。SD02はSD04溝跡と重複し、これよりも古い。

SD02は上幅2.1～2.5m・下幅0.8～1.1m、深さは20～30cmほどである。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

SD03はごく一部が検出されたのみであるが、上幅1.3～2.0m・下幅0.5～0.6m、深さ40～65cmほどで、SD02よりも深い。断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐～暗褐色シルト・粗砂などを主体とした自然堆積土である。

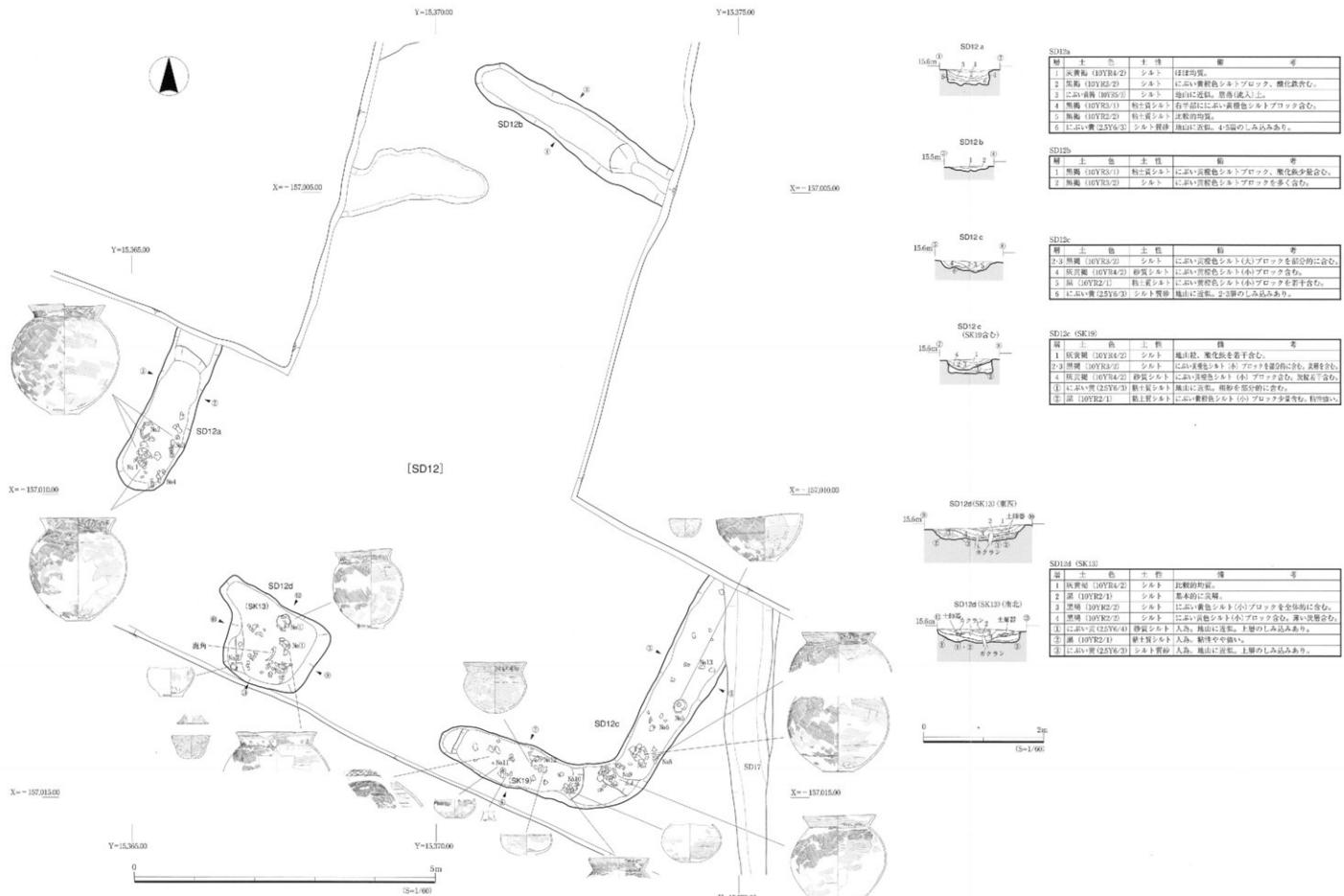
遺物は、SD02堆積土から土師器器台（第13図-1）・壺・壺などの破片、SD03堆積土から土師器小片が少量出土している。

### 【SD09】（第12図・第13図、図版6・7・11・12）

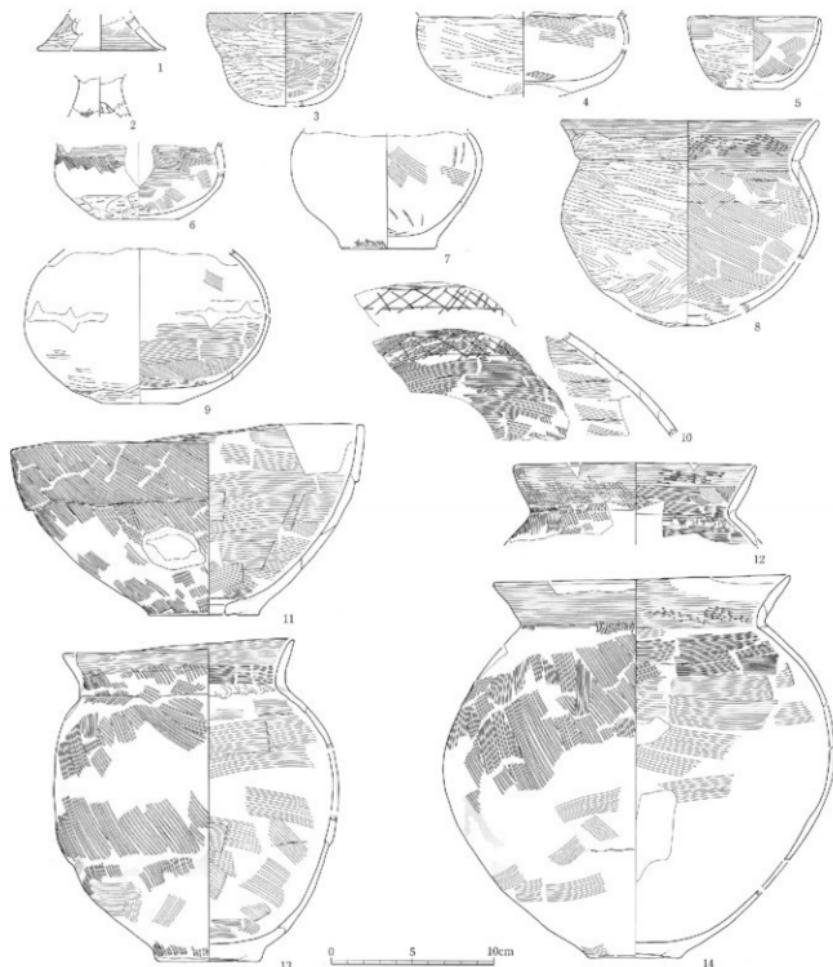
I区西端に位置し、SX08湿地の西側区域にある。南北方向に延びているが、北側はやや東へ曲がりながら調査区外へと延びている。IV層から掘り込まれている。

規模は、上幅1.8～2.5m・下幅0.6～1.0m、深さ15～40cmほどで、底面は北側よりも南側がやや深くなっている。断面形は幅広のU字形を呈する。堆積土は上層が灰白色火山灰を含む基本Ⅲ層：黒色粘土質シルト、中～下層が黒～黒褐色粘土質シルト・粘土を主体とする自然堆積土である。

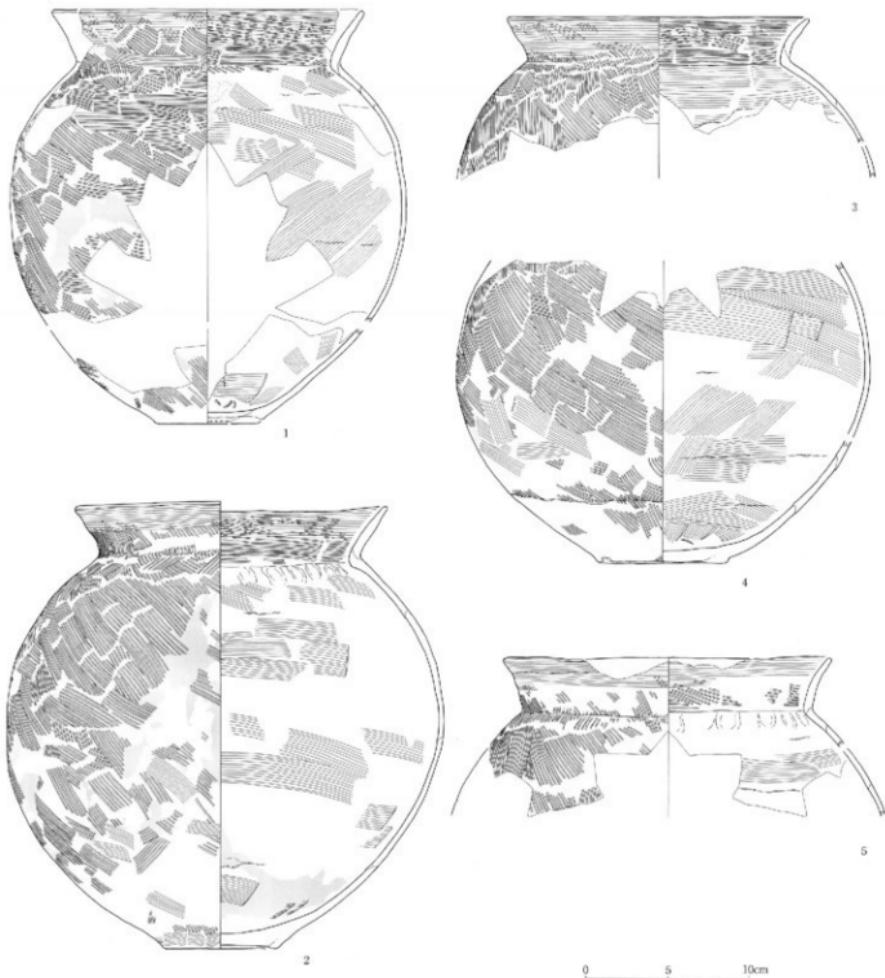
遺物は、基本Ⅲ層に対応する黒色粘土質シルト層よりもやや下位から土器類が比較的多く出土している。これらの土器類はいずれも個体ごとに集中するように分布し、ほぼ同じレベルから出土している（第12図、図版6・7）。土師器類には器台（第13図-2）・鉢・壺（第13図-3～5）・壺（第13図-7～10）・台付壺（第13図-6）などがある。4は頸部が欠落した有段口縁壺で、5は複合口縁壺である。壺類はいずれも中型品（器高30cm以下）である。



第7図 SD12方形周溝跡

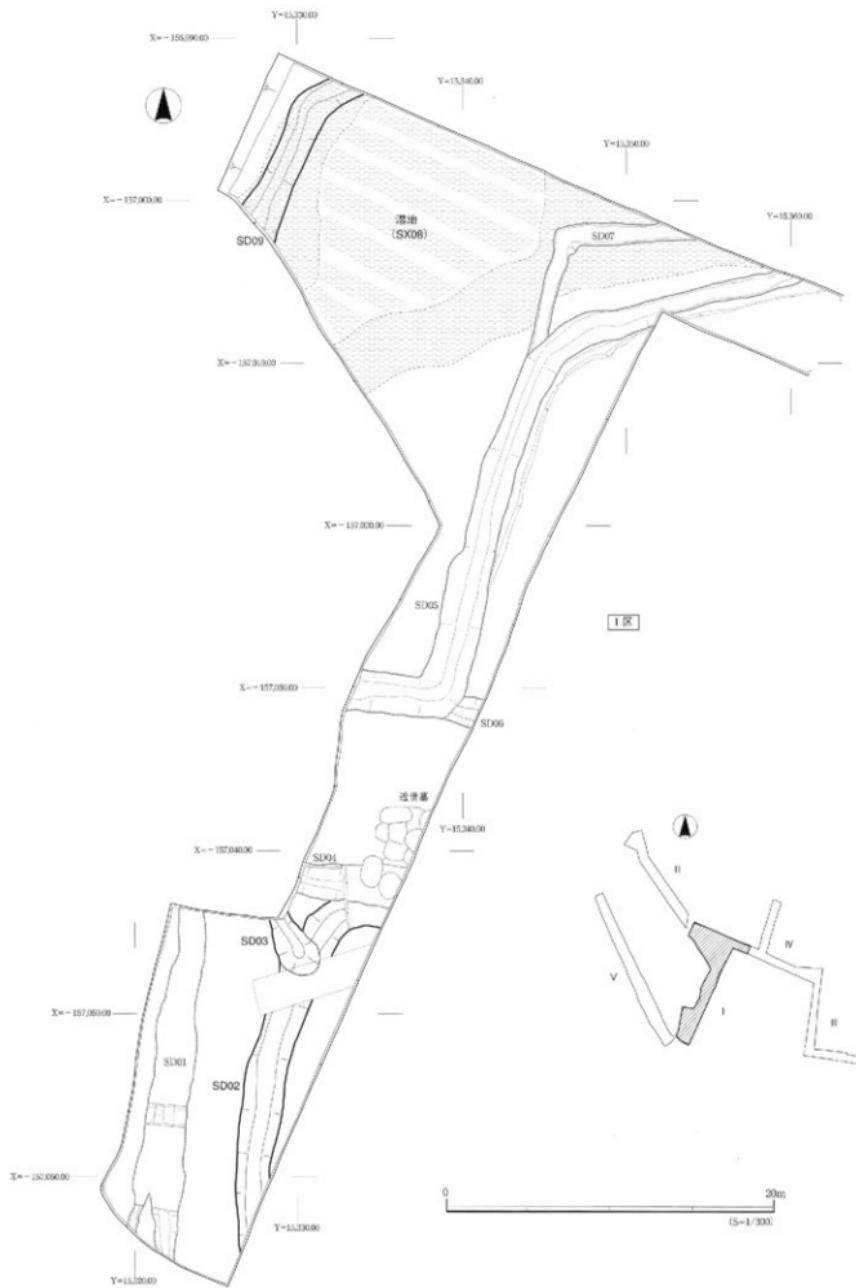


第8図 SD12方形周溝跡の出土遺物（1）

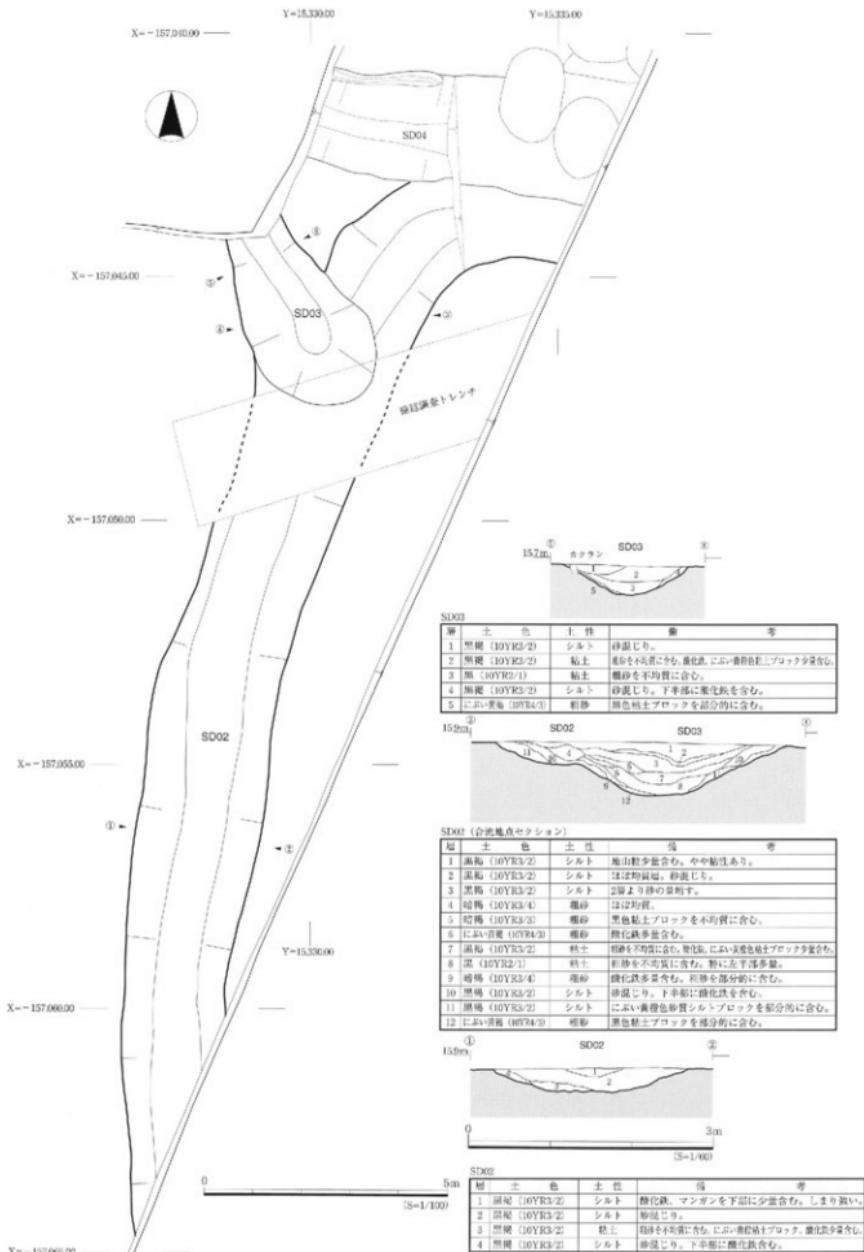


No.	器種	遺構／層	残在	底盤径 (cm)			特徴	専門機関	施級
				口徑	底径	厚度			
1	土器器 頭	SD12a-No.1, 4	1/5	(19.0)	(6.4)	(25.5)	外：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ・削一尾)ハケメ(炭化物付着) 内：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 外：(下)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 内：(上)ハケメ→ヨコテグ一部ハケメ・ナデ 内：(下)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 壁部にオサニ痕(炭化物付着)	11-1a, b	24
2	土器器 頭	SD12a-No.1, 2, 3	7/8	19.2	7.0	17.5	外：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 内：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 壁部にオサニ痕(炭化物付着)	11-2	23
3	土器器 頭	SD12c-No.8, 12	口～脚 1/3	18.4	—	—	外：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ 内：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ・ナデ	11-3	27a
4	土器器 頭	SD12c-No.7	脚～底 1/3	—	8.0	—	外：(上)ハケメ・ナデ 内：(上)ハケメ・ナデ 壁部にオサニ痕(炭化物付着)	11-4	27b
5	土器器 頭	SD12d(Sk13)No.1	口～脚 1/2	(30.0)	—	—	外：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ 内：(上)ハケメドヨコテグ一部ハケメ 内：(下)ハケメドヨコテグ一部ハケメ 壁部にオサニ痕	11-5	26

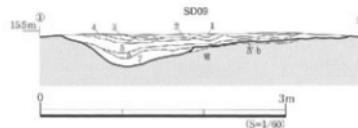
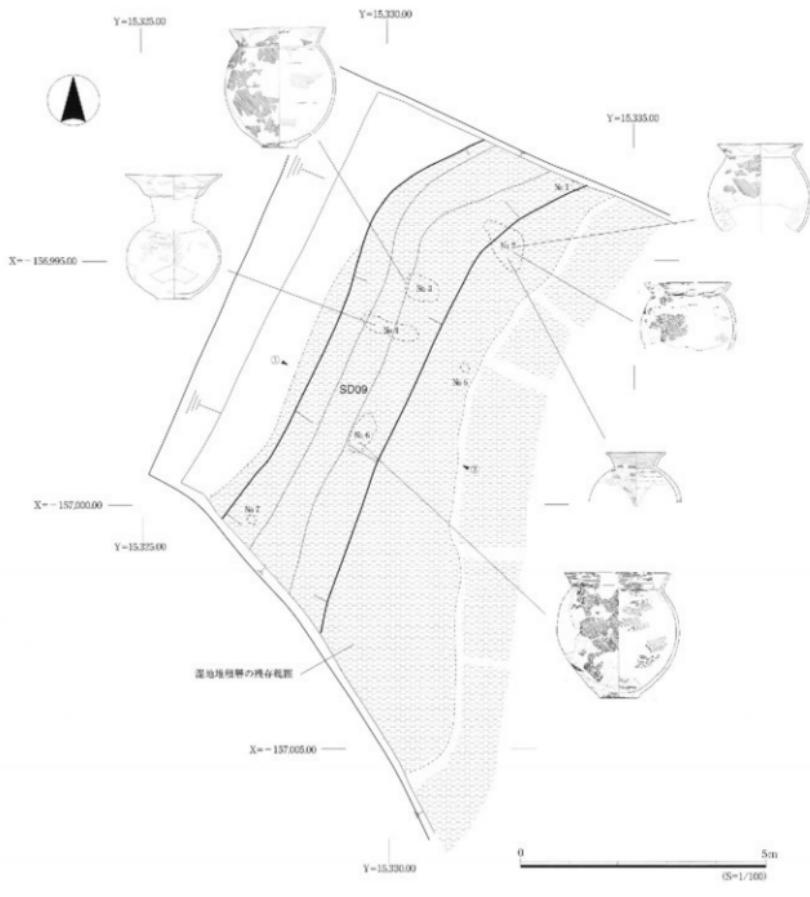
第9図 SD12方形周溝跡の出土遺物 (2)



第10図 古墳時代の遺構（I 区）

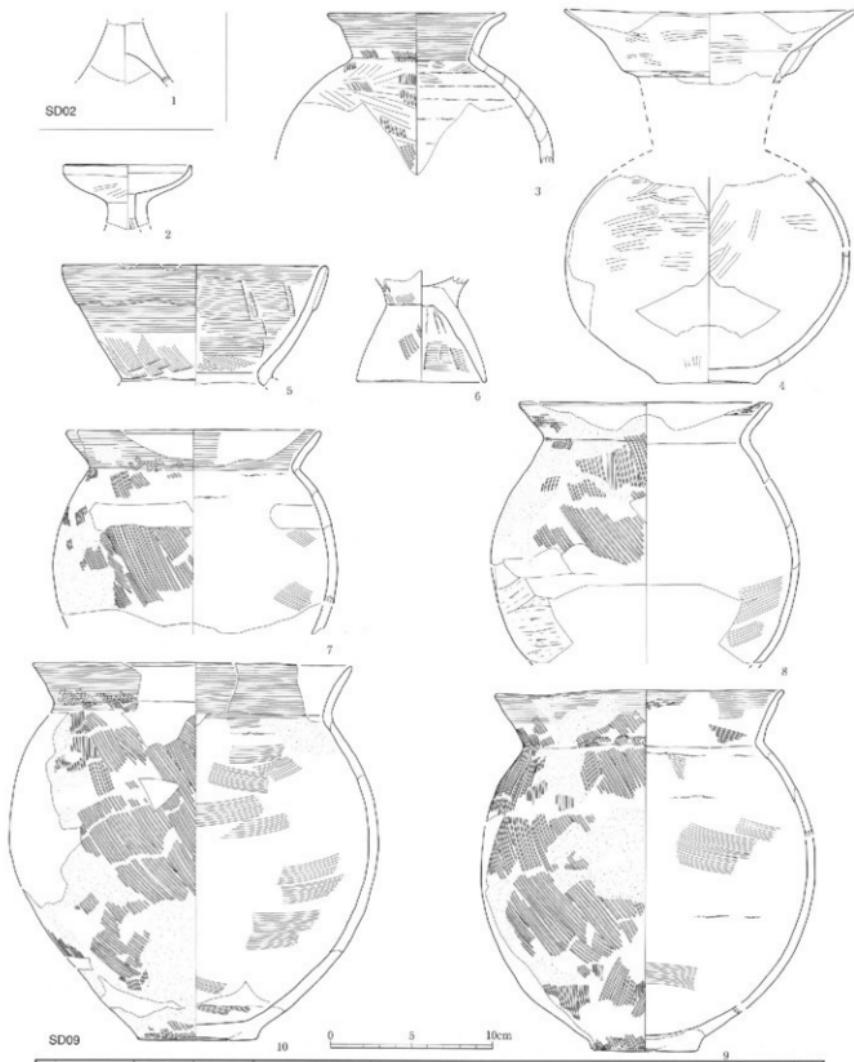


第11図 SD02・03溝跡の平・断面図



学名	種	学名	種	学名	種
1. 黒鳴 (10YR2'-2)	地生貴シロト	基本温調。	灰白色火炭状ブロッカ含む。		
2. 黒鳴 (10YR2'-1)	地生貴シロト	熱化現存干含む。			
3. 黒鳴 (10YR2'-2)	地生貴シロト	造出物含む。			
4. 黒鳴 (10YR2'-1)	地生貴シロト	地生貴シロト含む。			
5. 黒鳴 (10YR2'-1)	地生貴シロト	砂を不均質に含む。			
6. 黒鳴 (10YR2'-1)	粘土	鈍角形。			
7. 黑鳴 (10YR2'-1)	粘土	地表面凹。	頂面と不規則に混じり合ふ。		

第12図 SD09溝跡の平・断面図



No.	部	種	道府・県	残存	説明	計 数 (cm)	特 徴			写真図版	記録	
							固	液	被			
1	上部脚	酉町	SD92	無	腹部のみ	-	外:	(遊走)	(内:	(成虫)	11-6	
2	上部脚	酉町	SD92	被覆5	(78)	-	外:	(ガキ)	(遊走)	(内:	11-7	
3	上部脚	鹿	SD92-Ne2	口1/4	(108)	-	外:	(ガキ)	(遊走)	(内:	11-8	
4	上部脚	鹿	SD92-Ne1	1/13(3割)	(178)	62	内:	(ガキ)	(遊走)	(内:	12-1a	
5	上部脚	鹿	SD92-Ne1	1/13(3割)	(178)	162	-	(ガキ)	(遊走)	(内:	12-1b	
6	尾脚	酉町	SD92	腹部のみ	-	-	外:(口)	ヨコナギハラナギ	内:(口)	ヨコナギハラナギ	複合口器	
7	上部脚	鹿	SD92	口合4/5	-	8.0	外:	(ハメケ)	(一部ナゲ)	内:	ヘラナギ(成虫)	
8	上部脚	鹿	SD92	口合4/5	(155)	-	外:	(ナメケ)	(一部ナゲ)	内:	ヘラナギ(若虫)	
9	上部脚	鹿	SD92	口合4/5	(155)	-	外:	(ナメケ)	(一部ナゲ)	内:	ヘラナギ(若虫)	
10	上部脚	鹿	SD92	口合3/5	(176)	65	221	外:	(ナメケ)	(一部ナゲ)	(内:	ヘラナギ(若虫)
11	上部脚	鹿	SD92	口合3/5	(194)	72	231	外:	(ナメケ)	(一部ナゲ)	(内:	ヘラナギ(若虫)

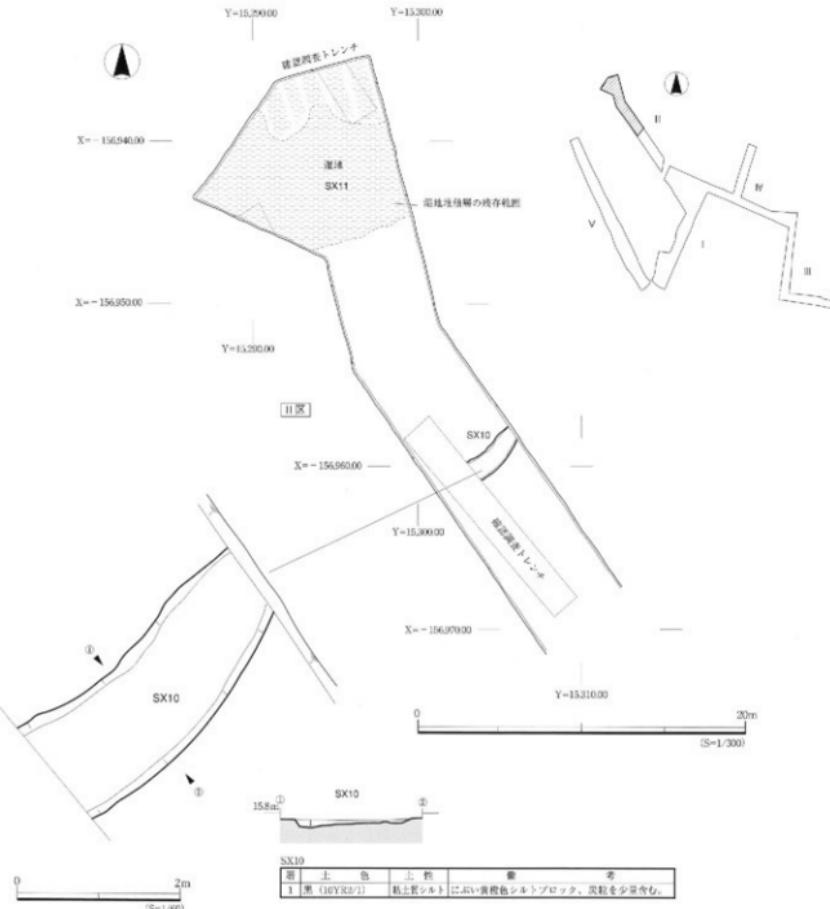
第13図 SD02・09溝跡の出土遺物

### C. 溝状遺構

#### 【SX10】(第14図)

II区中央からやや西寄りに位置する。南北方向に延びるが、全体的に浅く、両縁がやや不整な溝状を呈する。北側は調査区外へ延び、南側は確認調査トレンチより先が不明である。

規模は、上幅0.9~1.6m・下幅0.6~1.5m、深さ2~10cmほどである。西壁はやや急に立ち上がる部分もあるが、東壁はゆるやかで、底面にはやや凹凸がある。堆積土は黒色粘土質シルトを主体とする



第14図 古墳時代の遺構（II区）とSX10溝状遺構

自然堆積土で、若干、炭化物粒が混じっている。

遺物は、堆積土から土師器壺・甕などの破片が少量出土している。

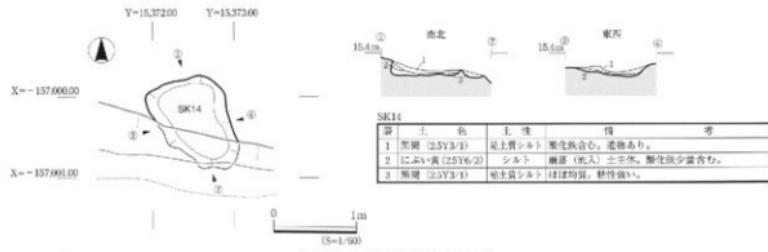
#### D. 土坑

【SK14】(第6図・第15図、図版8)

IV区の北側に位置する(第6図)。後述する中世期のSD05溝跡に壊されており、残存はやや不良である。

平面形は不整な隅丸方形状を呈していたとみられ、残存する長軸は125cm・短軸は90cmほどで、深さは15~21cmである。断面形は概ね皿状を呈するが、底面はやや凹凸があり、壁の一部(北壁)は垂直に立ち上がる部分がある。堆積土は3層に細分できるが、黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器壺破片が少量出土している。



第15図 SK14土坑(IV区)

【SK44】(第5図、図版8)

V区西端側に位置する(第5図)。この調査区は確認調査区のため、遺構は掘り下げていない。新しい溝によって一部が壊されている。

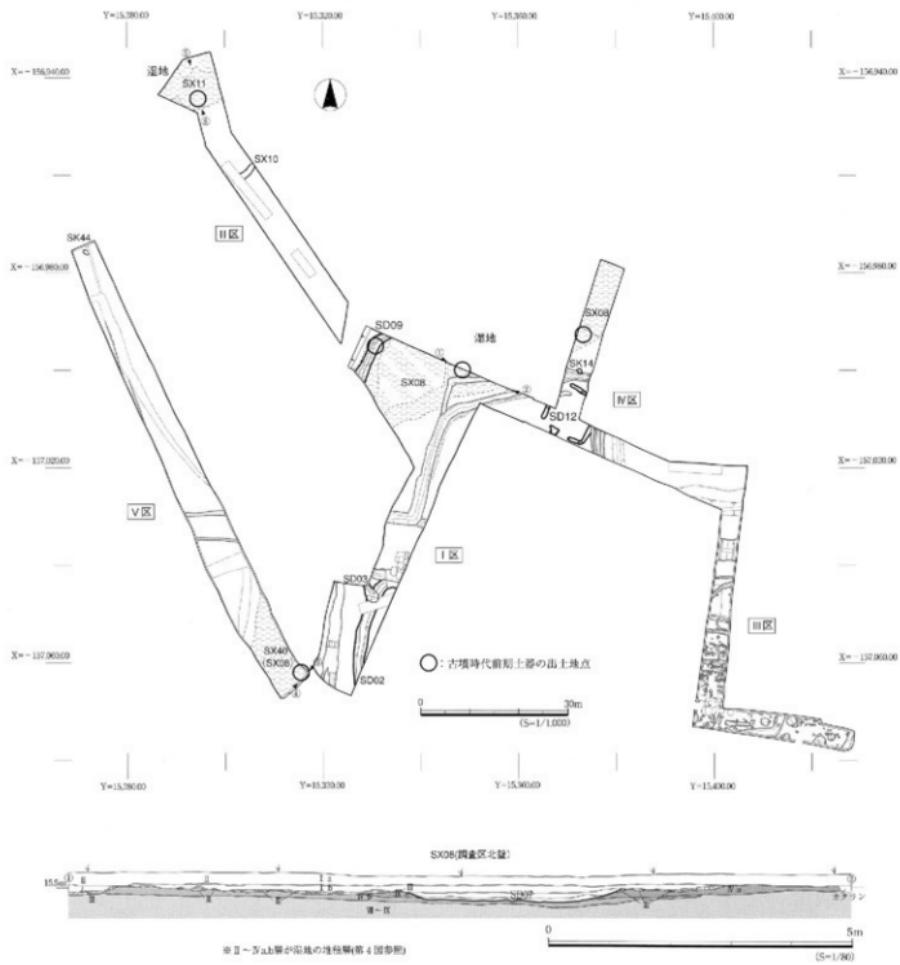
平面形は梢円形を呈する。長軸112cm・短軸58cmほどである。確認面で堆積土を観察すると、中央部は比較的均質な黒色シルトであるが、周縁部は地山ブロックを不均質に含んでいる。上面からは土師器小片が出土している。

#### E. 湿地(遺物包含層)

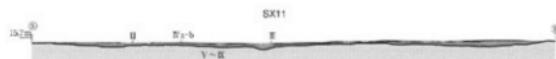
旧河川の名残りともみられる湿地であるが、今回の調査では明らかな河川跡と言える遺構は捉えられていない。その範囲には“灰白色火山灰”が痕跡的に分布し、その下位には黒色土層(基本Ⅲ・Ⅳ層)が薄く堆積している。

【SX08(SX40を含む)】(第16図・第17図、図版8・12・13)

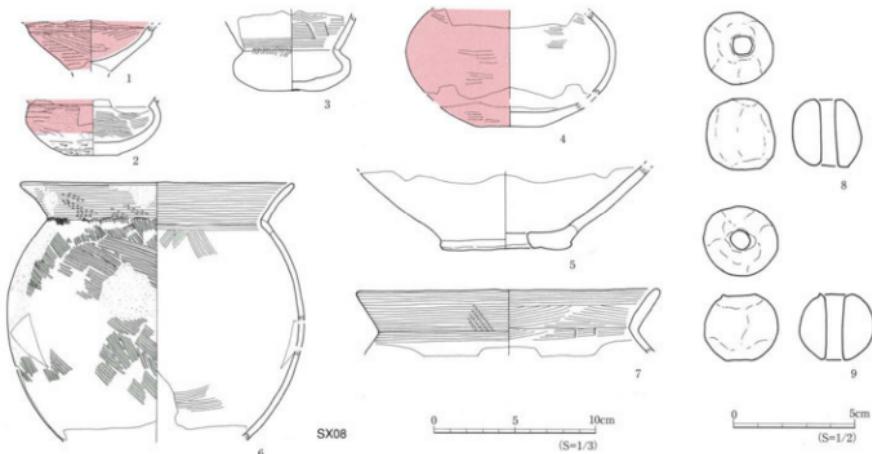
I・IV・V区で検出されたが、連続する一連の湿地とみられる(第16図)。その場合、少なくとも



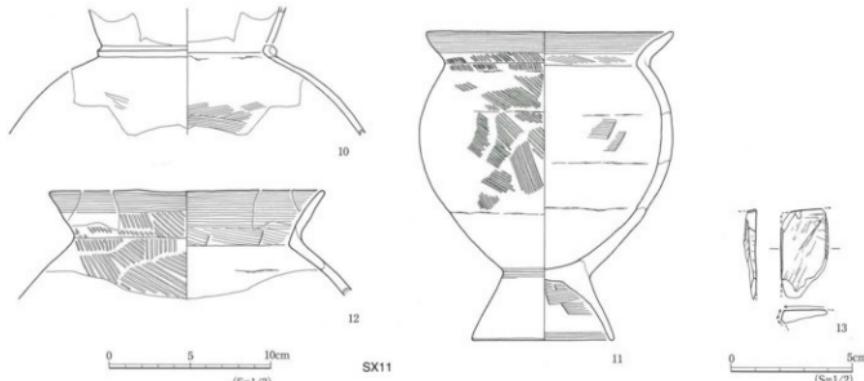
SS-40	土	色	土	色	備 考
1a	オーリーブ	GSY1/3	シルト質粘土	ほばほら。	
1b	オーリーブ	GSY3/2	シルト質粘土	鈣化度を含む。	
2	黒泥	(10YR3/2)	粘土質シルト	鈣化度を含む。糞臭い。	
3	灰黄泥	(10YR6/2)	粘土質シルト	木本に対応し、灰白色土山川原土を新規に含む。	
4	黒	(10YR2/1)	シルト質粘土	木本に対応し、斎化後、鉄分を部分的に含む。	
5	黒泥	(10YR2/2)	シルト質粘土	鈣化度多く含む。古墳周囲土器出土。	
6	黒	(DYR2/1)	粘土質シルト	ほばほら。	
7	緑褐色	(5YR3/6)	シルト	全体的にたんじや化鉄の着者有り。	
8	黒	(DYR2/1)	粘土	風化強い。黒成灰。	



第16図 濡地と古墳時代前期土器の出土地点



No.	器種	遺構/層	残存	法量(cm)				特徴	写真図版	登録
				口	横	深	径			
1	土師器 鋸台	I IXSX08 N'a	愛媛3/4	—	—	—	—	外: ハラミガキ→赤彩 内: ハラミガキ→赤彩	12-7	5
2	土師器 釜	I IXSX08 N'a	体~底1/3	—	—	—	—	外: 体~底 ハラミガキ→赤彩 ハラケアリ(剥落あり) 内: [体~底]ナデ	12-8	42
3	土師器 釜	I IXSX08 N'a	3/5	—	—	—	—	外: [口]ハタメヨコナギ(体~底) ハタメ(磨滅) 内: [口]ハタナデ(体~底) 剥離	12-9	2
4	土師器 釜	I IXSX08 N'a	胸~底部一部	—	4.0	—	—	外: 体~底 ハラミガキ→赤彩(磨滅) 内: [体~底]ナデ(磨滅)	12-10	4
5	土師器 有孔鉢	I IXSX08 N'a	底のみ	—	8.0	—	—	外: [口]ハタメ(磨滅) 内: [体~底] ハタメ 剥離: 2.5~3.0cm	13-1	3
6	土師器 瓢箪	V IXSX40 (SX08)	口~側1/4	15.5	—	—	—	外: [口]ハタメヨコナギ(口)ハタメ(剥落あり) 内: [口]ヨコナギ/ヨコナギ(底)ナデ(磨滅)	13-3	43
7	土師器 瓢箪	I IXSX08 N'a	口縁部1/2	(18.7)	—	—	—	外: [口]ハタメヨコナギ 内: [口]ヨコナギ/ハラナデ	13-2	7
8	土玉	I IXSX08 N'a	一部欠	器高: 2.8cm	器幅: 2.8cm	孔径: 0.8cm	全体磨滅	—	13-4	±1
9	土玉	I IXSX08 N'a	一部欠	器高: 2.7cm	器幅: 3.0cm	孔径: 0.8cm	全体磨滅	—	13-5	±2



No.	器種	遺構/層	残存	法量(cm)				特徴	写真図版	登録
				口	横	深	径			
10	土師器 収	II IXSX11 N'a	D~側第一部	—	—	—	—	外: [口] (磨滅) [口]ハラミガキ(磨滅) 内: [口] (磨滅) [口]ナデ(磨滅) 局部に隆起	13-6	22
11	土師器 台付甌	II IXSX11 N'a	4/5	15.2	8.7	—	—	外: [口] ハタメヨコナギ(口)ハタメ(磨滅) 内: [口] ヨコナギ/ナゲ(口)ハタメ(磨滅) [口] ハラナデ/ヨコナデ	13-7	30
12	土師器 瓢箪	II IXSX11 N'a	D縁部1/2	17.0	—	—	—	外: [口] ヨコナギ/ナゲ(口)ハタメ(磨滅) 内: [口] ハラナデ/ヨコナデ(口) (磨滅)	13-8	21
13	砾石	II IXSX11 N'a	一部	シロト岩質 残存長: (3.4)cm	—	—	—	内: (0.5)cm 残存幅: (1.9)cm 残存厚: (0.5)cm	13-9	65

第17図 SX08・SX11湿地の出土遺物

南北方向で長さ100m以上あり、幅はI区では15~20mほどである。灰白色火山灰（II層）やその下位の黒褐色シルト質粘土（III層）や黒褐色～暗褐色シルト質粘土（IV層）はいずれもこの凹地に残存しているが、III層は厚さが5cm、IV層は15cmほどと薄い。以前の開田の際に全体的に削平を受けているようである。

遺物はI区の北東部、IV区の南西部、V区（掘り下げは土層観察のトレンドのみ）の東端部付近のIVa層から比較的多く出土しているが（第16図）、小破片資料が目立つ。土師器類には器台（第17図-1）、鉢（第17図-2・3）、壺（第17図-4）、有孔鉢（第17図-5）、甕（第17図-6・7）などがある。他に土玉（第17図-8・9）が出土している。1の器台、2の鉢、4の壺には赤彩が施されている。

#### 【SX11】（第14図・第16図・第17図、図版8・13）

II区西端に位置する。南北に伸びているとみられるが、全体的に削平されており、堆積層は薄い。前述のSX08と同様に、灰白色火山灰や黒褐色粘土質シルト（III層）、黒褐色～暗褐色粘土（IV層）の分布が厚さ10cmほど認められる。

遺物は、南東部付近から土師器壺（第17図-10）、台付甕（第17図-11）、甕（第17図-12）、砥石（第17図-13）などが出土している。10の壺は頸部に隆帯が巡っている。

#### F. その他の出土遺物（第18図、図版13）

表土層などから、土師器高環（第18図-1）、壺・甕（第18図-2）などが若干数出土している。1の高环は棒状の脚部のみの資料で、脚上部は中実、下部は中空である。



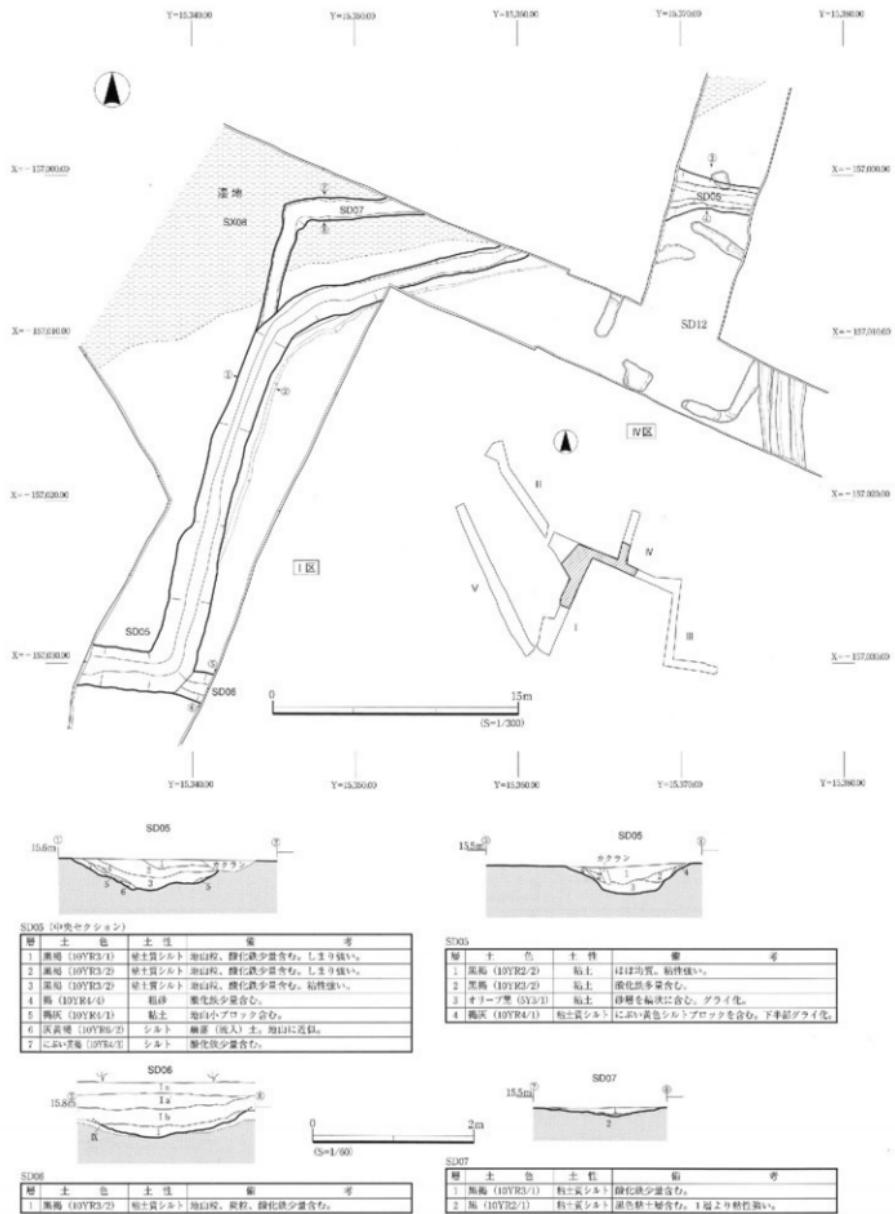
No.	器種	出土地/層	成形	法 量(cm)			特 徴	写真図版	盤組
				口 径	底 径	高 度			
1	土師器 高環	I区 通航町	輪削のみ	-	-	-	外：ヘラミガキ（施成） 内：（施成）	13-10	18
2	土師器 瓢	V区 Ia	1D図版1/2	(14.6)	-	-	外：[1]ハケメ→[2]コナア[3]ハケメ 内：[1]ハケメ→[2]コナア[3]ハケメ	13-11	44

第18図 その他の出土遺物

#### (2) 中世

##### 1) 検出状況（第19図、図版9・13）

中世の遺構は、中央のI区北側からIV区にかけて溝跡3条を検出したのみである。I・III・IV区の時期不明の溝跡の中には中世に属する可能性を残すものもあるが、遺物が出土していないため明確ではない。遺物は、溝跡から陶器類の破片が少量と砥石、V区SX40（SX08）湿地堆積層上部から陶器壺もしくは甕の破片が出土している。



第19図 中世の遺構（I・IV区）

## 2) 遺構と遺物

### A. 溝跡

【SD05・SD06】(第19図・第20図、図版9・13)

I区北側～IV区にかけて位置する。SD05は南側が「」形に西へ屈曲し、北側は東へ曲がりながら延びている。SD06はSD05の南の屈曲部分に接続する。SD05はSD07溝跡と重複し、これよりも新しい。

SD05は上幅1.2～2.5m・下幅0.7～0.9m、深さは35～40cmほどである。断面形はU字形～逆台形状を呈する。堆積土は黒褐色～褐色粘土質シルトなどを主体とする自然堆積土である。

SD06はごく一部検出されたのみであるが、上幅1.7～1.8m・下幅0.5～0.7m、深さ30～35cmほどで、SD06よりも浅い。断面形は深いU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は、SD05堆積土から陶器鉢（第20図-1）・壺もしくは甕の破片（第20図-2・3）、砥石（第20図-4）など、SD06堆積土から陶器壺もしくは甕の破片（第20図-5）が出土した。

【SD07】(第19図・第20図、図版9)

I区北側に位置する。「」形に屈曲し、東端は調査区外へと延びている。SD05溝跡、SX08湿地（古墳時代前期）と重複し、SD05よりも古く、SX08よりも新しい。

規模は上幅0.9～1.1m・下幅0.7～1.0m、深さが10～15cmほどである。断面形は皿状を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は、古墳時代の土師器片が少量出土したのみである。



No.	器種	遺構/層	残存	法 量 (cm)			特 性	写真番 号	登録 番号
				口 径	底 径	厚 さ			
1	陶器 瓶	I区SD05 地	口縁部	—	—	—	左地灰 内外：ヨコナゲ 粘土：灰褐色	13-12	新2
2	陶器 甕or壺	I区SD06 地	瓶頸部	—	—	—	地灰 不明 外：自然釉 内：ナゲ 粘土：灰褐色	13-13	新4
3	陶器 甕or壺	I区SD06 地	瓶頸部	—	—	—	甕地灰 外：自然釉 内：ナゲ 粘土：灰褐色	13-14	新1
4	砥石	I区SD05 地	尖頭部	砂鉄製	残存長：17.0 cm	残存幅：16.0 cm	甕地灰 外：一部自然釉 内：ナゲ 粘土：灰褐色	13-17	61
5	陶器 甕or壺	I区SD06 地	瓶頸部	—	—	—	甕地灰 外：一部自然釉 内：ナゲ 粘土：灰褐色	13-15	66
6	陶器 甕or壺	II区SX49 地上	瓶頸部	—	—	—	甕地不明 内外：ナゲ 粘土：灰褐色	13-16	新15

第20図 中世の遺物

### (3) 近世・近代以降（時期不明を含む）

#### 1) 検出状況（第21図、図版9）

調査区東側のⅢ区では柱穴跡、溝跡（大溝跡を含む）、井戸跡、土坑などを多数検出した。これらの遺構は限られた範囲に密に分布しており、それぞれの重複関係も著しい。遺構の埋土および堆積土にはI b層などを起源とする褐色～暗褐色土を含んでおり、遺構からは少量ではあるが近世・近代以降の陶器類が出土している。また、Ⅰ区中央の調査区東壁際では近世墓が検出されている。

これらの遺構の大半については平面上での確認であり、遺構の掘り下げは一部の柱穴跡や溝跡・井戸跡などに限定している。以下の検出遺構や遺物の説明は、簡単な記述にとどめておく。

#### 2) 遺構と遺物

##### A. 挿立柱建物跡

Ⅲ区に多数の柱穴が集中して分布しており、特に調査区（L字形）の中央付近に多い。少なくとも10棟以上の挿立柱建物跡になるとみられる。柱穴には圓丸方形状～橢円形状のものがあり、一辺もしくは径が50cm～80cmほどのものが多い。柱穴の多くには径12～15cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。柱穴掘り方埋土は大きく二つに分けられ、地山ブロックを含む暗褐色土主体のものと黒褐色土主体のものがある。柱穴には重複関係が多く認められるが、概ね前者が後者よりも新しいようである。

##### B. 大溝跡・溝跡

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区で東西方向あるいは南北方向に延びている溝跡のうち、Ⅰ区ではSD01・SD04、Ⅲ区ではSD20～24・36・37、Ⅳ区ではSD15～17などである。これらのうち、Ⅲ区の北側で検出されたSD20は上幅約4m・深さ1.3mと規模が大きく、また、おなじⅢ区の逆L字に屈曲するSD36も比較的規模が大きく、上幅1.6m・深さ0.4mほどある。SD20からは唐津産の向付（第22図-1）、碗（第22図-2）などの近世陶器、石鉢（第22図-3）などが出土している。このSD20大溝跡より以前に近世以降の遺構が集中することからすると、この大溝跡は近世屢歴の区画溝になる可能性が高いと考えられる。SD32や他の溝跡からは年代がわかる遺物がほとんど出土していないが、これらの溝跡はいずれも近世以降のものとみられる。なお、Ⅲ区東端のSD37からは近代以降の磁器が出土しており、ほかの溝跡よりも一時期新しいものである。

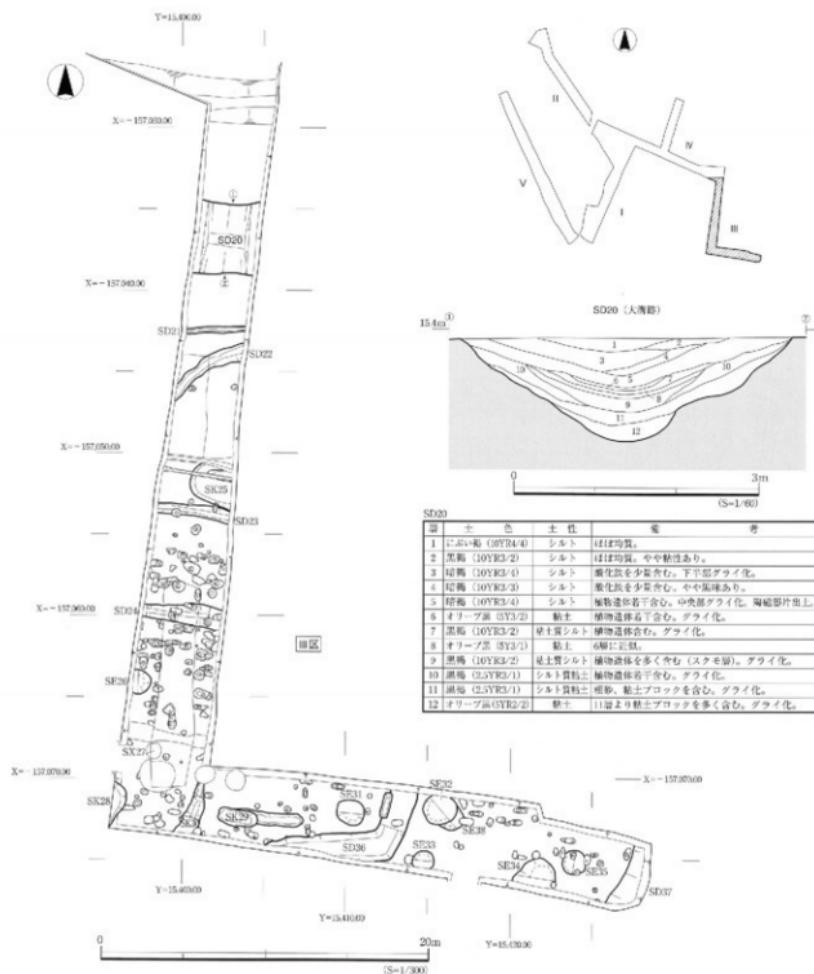
##### C. 井戸跡

Ⅲ区で8基検出されている。すべて半削したが（一部のみ底面まで）、いずれも素掘りのものである。径1.3m～1.8mで、深さは1.2m以上ある。遺物はほとんど出土せず、SE32からのみ近世磁器皿の小破片が出土した。

##### D. 墓場

近世墓がⅠ区中央付近で検出された（第5図）。少なくとも10基以上あるとみられる。確認面で骨

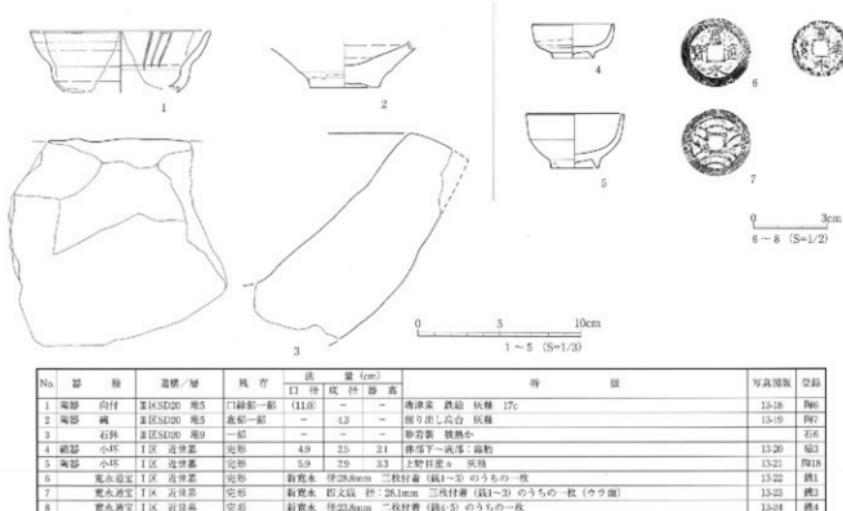
片や副品とみられる陶磁器小壺（第22図-4・5）・銭貨（寛永通宝）（第22図-6～8）などが出土している（これらの墓壁については精査を行っていない）。



第21図 近世・近代以降の遺構（Ⅲ区）

## E. 土坑

Ⅲ区中央付近では大小の土坑が数基検出されている。これらのうち、SK25やSK29からは近世陶磁器の小破片が出土した。



第22図 近世の遺物

## (4) その他

Ⅲ・Ⅳ区の表土層や古墳時代の遺構堆積土から、縄文時代の土器片や石器（第23図-1～3）がごく少量出土している。1は縄文時代晩期（大洞A式）の浅鉢の口縁部片、2は碧玉製の石鏃、3は頁岩製の小型尖頭器である。



第23図 縄文時代の遺物

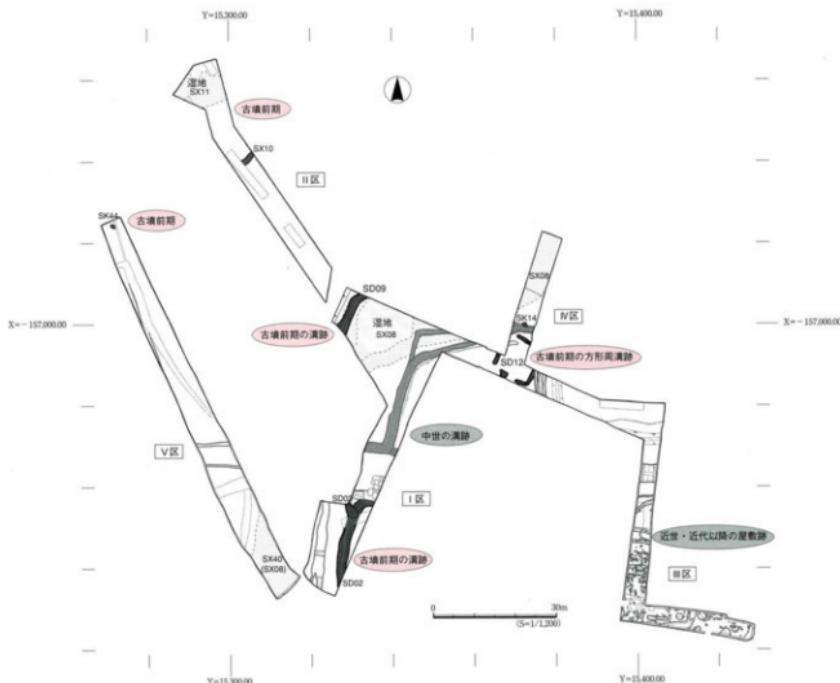
## 第IV章 総括

今回の発掘調査は、美里町中坪西部地区の県営「ほ場整備事業」に伴う調査であり、水路および道路新設区域を対象としたものである。調査では古墳時代前期の方形周溝跡や溝跡、土坑、湿地などが検出され、他に中世の溝跡、近世・近代以降の屋敷跡とみられる遺構群などが確認された（第24図）。ただ、狭長なトレンチ状の調査区であることから、遺構は部分的な検出に留まり、全体的な状況を把握することは難しい。ここでは主要な古墳時代前期の遺構・遺物を中心にその要点をまとめ、他の時期については最後に若干触れておきたい。

### 1. 古墳時代（前期）

#### (1) 出土土器とその年代的位置づけ

古墳時代前期の土器類は、東側のⅢ区を除いた広範な区域から出土している。第25図に出土土器の一覧を示した。これらはいずれも前期：塩釜式（氏家 1957）の特徴をもつものであるが、時期的にはやや幅がありそうである。比較的一括性のある一群は、SD12方形周溝跡出土土器類、SD09溝跡出



第24図 各期の遺構分布図

土器類である。

SD12出土土器には土師器器台・鉢・壺・台付壺・有孔鉢がある。器台には透孔（3孔）をもつもの、受部と脚部の間に貫通孔のないものがある。鉢には体部が半球形で丸底のいわゆる小型丸底鉢、体部が内輪して立ちあがる平底のものなどが含まれている。壺には平底で球形に近くやや扁平な胴部をもつ小型壺のほかに、肩部に斜格子状の沈線文が施された大型壺がある。壺類はいずれも中型品で、胴部は丸みをもち、口縁部がくの字状に屈曲し外反するものが主体である。胴部の調整はハケメ調整が基本で、底部にはその中央が窪むいわゆる「輪台技法」が認められる。有孔鉢は浅鉢状の形態で、外面にはハケメ調整が施されている。

SD09出土土器には土師器器台・壺・壺・台付壺などがある。器台には口縁部が垂直に立ち上がる受部、貫通孔のない脚部がある。壺には有段口縁で胴部が球形のもの、口縁部が外反し胴部が球形のもの、複合口縁のものなどがある。壺類はSD12出土のものとほぼ同様である。他にハの字に聞く台付壺の台部が含まれている。

これら以外では、SX08湿地から赤彩の施された器台や鉢・壺、SX11湿地から頸部に隆帯のある壺、I区（遺構確認時）から高坏の棒状脚などが出土している。

さて、これらの土器群の時期的位置づけについて検討してみたい。前期塩釜式土器の編年についてこれまでに丹羽、次山、辻の各氏の論考（丹羽 1985、次山 1992、辻 1995）などがあり、細部の相違を除けばその枠組みは概ね共通している。辻氏はⅠ～Ⅲ期に大別し、各2～4段階に細別しているが（辻 1995）、これを参考にSD12やSD09出土資料をみると、透孔をもつ器台や貫通孔のない器台、小型丸底鉢の形態、有段口縁壺、ハケメ調整を基本とする胴部球形の壺類などは、辻編年のⅡ期後半からⅢ期段階の幅の中に位置づけられるものである。ただし、形態の簡略化や調整の粗雑化が進むⅢ期終末段階の特徴を示す資料は見当たらないので、この段階までは降らないとみられる。いずれにしても、SD12やSD09出土資料は年代をより反映する器台や高坏・鉢・壺などの小型精製土器類の出土数が少なく、しかも全体形が分かることもあることから、これ以上の限定は難しい。

また、他の断片的な資料の中には棒状脚の高坏、頸部に隆帯を巡らす壺などがあるが、前者はⅢ期後半、後者はⅡ期の特徴とされる資料である。これらも勘案してみれば、本遺跡の出土土器は塩釜式の中でもおよそその後半期に属するものと言えそうである。

## （2）SD12方形周溝跡の特徴と性格について

IV区中央付近で検出されたSD12方形周溝跡について、その特徴や性格などについて検討する。

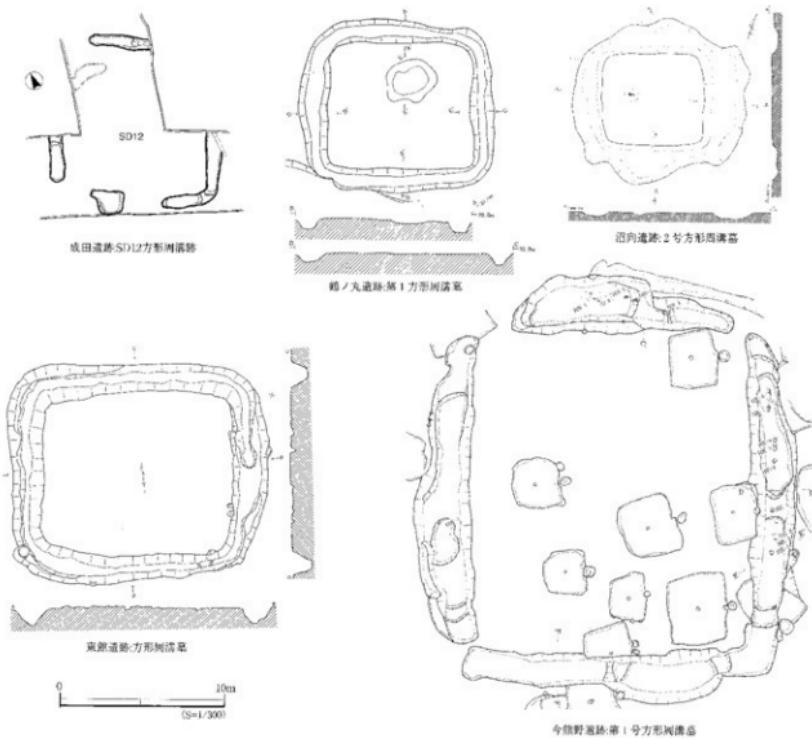
このSD12方形周溝跡は全体を検出してはいないが、周溝を含めたその規模は東西10.6m×南北11.0mほどであり、ほぼ正方形状を呈しているとみられる。周溝は全周せず、少なくとも南辺から西辺部分、北辺部分が途切れている。周溝跡の底面はところどころ土坑状に窪んでおり、一定の深さではなく、周溝の深さは浅いところでは10cm程度しか残存していない部分があることから、全体的に若干削平を受けているとみられる。溝で区画された内部では土坑や柱穴などの造構は確認されていない。ただ、周溝堆積層の中位よりやや下には地山ブロックを多く含む黄褐色層があることから、これが区

第25図 古墳時代前期の遺物一覧

画内部からの崩落土とすれば、その内部には盛土による高まりが存在した可能性も考えられる。

周溝の堆積土は基本的に自然流入土であるが、底面近くには壁面からの崩落土とみられる層（堆6）と黒褐色シルト層や灰黄褐色シルト層（堆5～堆4）が薄くみられ、後者の層の中に土器類が多く含まれていた。これらの堆積層の上には前述の地山ブロックを多く含む層（堆3）があり、さらにその上部には灰褐色～黒褐色シルト層（堆2～堆1）が堆積している。この上部層からは遺物はほとんど出土していない。なお、第7図を見ても分かるように、前述した土器類の大半はSD12の南半側から出土しており、北半側では土器の集中は認められない。

ところで、古墳時代前期のこうした形態と規模の遺構については県内でも多くの報告例があり（第26図）、栗原市（旧志波姫町）鶴ノ丸遺跡（宮城県教育委員会 1981a）、同市（旧高清水町）東館遺跡（宮城県教育委員会 1980b）名取市今熊野遺跡（宮城県教育委員会 1985）、仙台市沼向遺跡（仙台市教育委員会 2000）など、前期の中でも特に後半段階に集中している（註1）。これらはいずれも「方形周溝墓」とみられている。平面形は方形が主体を占め、規模は10～15m前後のものが多く、周溝は



第26図 SD12方形周溝跡と県内の方形周溝墓

全周するものと南辺や隅が陸橋状に途切れているものがある（宮城県教育委員会 1998）。ただ、区画内部から明確な墓壙（主体部）などが検出された事例はないようである。周溝内からは土師器器台・鉢・高杯・小型壺などの小型精製土器や大型壺・甕・有孔鉢などが出土する場合が多く、大型の方形周溝墓では底部や胴部に穿孔された複合口縁や有段口縁の大型壺などが目立つ。こうした方形周溝墓は数基がまとまって「群」をなす場合が多く、また、居住域からは離れた区域に認められる。

このような検出事例と比較すると、SD12方形周溝跡は「方形周溝墓」とされる遺構に類似している。SD12は少なくとも居住域からは離れた地点にあるとみられ、その形態や規模、周溝内の堆積土や遺物の出土状況などにも共通点がある。したがって、現時点ではSD12を他の事例と同様に「方形周溝墓」としてみるのが妥当と思われる。ただし、SD12のように周溝が途切れる部分が多く、1基のみの検出という点では他の事例とはやや違いがあり、また、今回の調査ではほかに「墓」とみなしうる遺構や遺物が検出されていないという点を重視すれば、SD12を「墓」といった性格のみに限定することなく、たとえば、他の祭祀や儀礼などに伴う施設（区画）としての性格も考慮する必要があるかもしれない。

### （3）古墳時代前期の遺構群の広がりについて

遺跡が所在する自然堤防上は、開田による削平などでは平坦な地形になっているが、その微地形をみると、周辺よりやや高い微高地とより低い低地部（比高差1～1.5m）から形成されていることがわかる。今回の調査区でもその範囲に微高地と低地部（湿地2ヶ所：SX08・SX11）を含んでいる。こうした地形と2005年度の確認調査の結果も合わせてみると、古墳時代前期の遺構はSX08湿地の東・北側区域とSX11の南側区域の微高地に広がることが予想される。その範囲は少なくとも東西200m・南北200mと推定される。

ところで、今回の調査区では「方形周溝墓」の可能性があるSD12方形周溝跡を検出したが、竪穴住居跡は未確認である。仮にSD12がある付近が墓域とすると、居住域はやや離れた場所にある可能性が高いと考えられる。この場合、前期の居住域が形成されていた区域は南側のSD02が展開する付近か（註2）、さらに離れた南西側の微高地（第3図のA地点より西側）もしくは北東側の微高地（C地点の東側：長岡針遺跡）付近になるのではないかと推測される。

## 2. 中世

中世の遺構や遺物は中央のI・IV区とV区東側において確認されているが、遺構はわずかにI・IV区のSD05～SD07溝跡3条のみであり、また、遺物はこれらの溝跡やV区のSX40（SX08）湿地堆積層上部から少量出土しているのみである。中世期の遺構群は、付近の地形や遺構・遺物の分布からするとI区以東に分布する可能性があるものの、今回の調査では明らかにできなかった。

## 3. 近世・近代以降

東側のIII区においてのみ、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが密集して検出されているが、付近か

らは近世陶磁器、近代以降の陶磁器が出土しており、遺構の掘り込み面も近世以降とみられる暗褐色土上（Ib層）上からなので、これらの遺構はいずれも近世・近代以降と考えられる。また、これらは北側のSD20大溝跡を境にこれより北には全く分布していないことや、一部区域に建物跡や戸跡が密集することなどから考えると、Ⅲ区の遺構群はSD20大溝跡によって区画された近世・近代以降の屋敷跡に間違るものではないかと推測される。すぐ西側のⅠ区に近世以降の墓塚群があるが、この屋敷に関連する可能性がある。

#### 註

- 1) 前半段階に位置づけられる例には、石巻市新山崎遺跡（石巻市教育委員会 2000）、仙台市藤田新田遺跡（宮城県教育委員会 1994）などがある。
- 2) SD02溝跡は、その形状・規模からみれば、集落を取り囲む「区画溝」としての可能性も考慮する必要があるが、出土遺物がわずかであるという状況から居住域に近い溝跡とは考えにくい点もある。

#### 引用・参考文献

- 石巻市教育委員会 2000『新山崎遺跡－蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第8集
- 2003『新金沼遺跡－高規格道路「三陸自動車道」建設に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第11集
- 氏家和典 1957『東北土師器の型式分類とその編年』『歴史』第14輯 pp.1~14
- 小牛田町教育委員会 1976『山前遺跡』
- 仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集
- 2000『沼向遺跡第1～3次調査－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書I－』仙台市文化財調査報告書第241集
- 田尻町教育委員会 2001『新川横跡推定地4』田尻町文化財調査報告書第6集
- 次山 淳 1992『埴輪式土器の変遷とその位置づけ』『完班』歴史文化財研究会15周年記念論文集 pp.235~248
- 辻 秀人 1989『東北南部における古墳出現期の土器編年 その1 会津盆地』『東北学院大学論集 歴史学 地理学』第26号 pp.105~140
- 1995『東北南部における古墳出現期の土器編年 その2』『東北学院大学論集 歴史学 地理学』第27号 pp.39~88
- 日本考古学協会編 1993『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会 1993年度新潟大会資料
- 追町教育委員会 1995『佐沼城跡－近世武家屋敷と古代の集落跡－』追町文化財調査報告書第2集
- 古川市教育委員会 1999『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第25集
- 宮城県教育委員会 1980a『留沼遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集
- 1980b『東部遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第65集
- 1981a『鶴ノ丸遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書－V－』宮城県文化財調査報告書第77集
- 1981b『日向町横穴墓群』『東北新幹線関係道路調査報告書－V－』宮城県文化財調査報告書第77集
- 1985『今熊野遺跡』『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集
- 1992『野田山遺跡』宮城縣文化財調査報告書第145集
- 1994『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集
- 1998『山王遺跡町地区の調査－県道泉塙益線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集
- 2003『山王遺跡』『塙の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第195集

# 写 真 図 版





1. 成田遺跡の空中写真（上が北）

国土交通省：国土地理情報（昭和50年撮影  
カラー：空中写真。整理番号：CTO-75-27-c8b-1)  
縮尺：約1/12000



2. 遺跡近景（南より）

図版 1 成田遺跡の空中写真および近景



1. I区南側全景（南から）



2. I区北側全景（東から）



3. II区全景（南東から）

図版2 I・II区の調査区



図版3 III～V区の調査区



1. SD12方形周溝跡（南東から）



2. SD12a土器出土状況（南から）



3. SD12c土器出土状況（南から）



4. SD12c有孔鉢出土状況（南から）



5. SD12c土器出土状況（南から）



6. SD12a断面（南から）



7. SD12c断面（南から）

図版4 古墳時代前期の遺構（1）

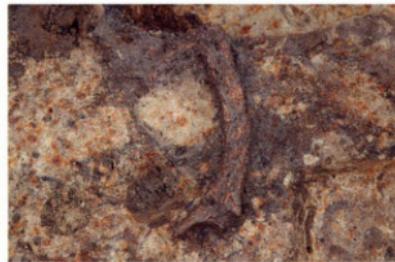
IV区：SD12方形周溝跡



1. SD12d (SK13) (南から)



2. SD12d (SK13) 土器出土状況 (南から)



3. SD12d (SK13) 鹿角出土状況 (南から)



4. SD12d (SK13) 南北断面 (東から)



5. SD12c西端 (SK19) (南から)



6. SD12c西端 (SK19) 土器出土状況 (南から)



7. SD12発掘状況 (南東から)

図版5 古墳時代前期の遺構 (2)

IV区：SD12方形周溝跡



1. SD02溝跡（南から）



2. SD02・03溝跡交差部分（南から）



3. SD02・03交差部分断面（北から）



4. SD09溝跡検出状況（南から）

図版6 古墳時代前期の遺構（3） I区：SD02・03・09溝跡



1. SD09溝跡  
南半部掘り下げ状況（南から）



2. SD09土器出土状況



3. SD09土器出土状況



4. SD09実掘状況（南から）

図版7 古墳時代前期の遺構（4） I区：SD09溝跡



1. IV区SK14土坑（南から）



2. V区SK44土坑（南から）



3. I区SX08湿地の黒褐色土の広がり（西から）



4. I区SX08湿地の断面（南西から）



5. V区SX40（SX08）湿地（南東から）



6. V区SX40（SX08）断面部分（南西から）



7. II区SX11湿地（南から）



8. II区SX11湿地土器出土状況

図版8 古墳時代前期の遺構（5）

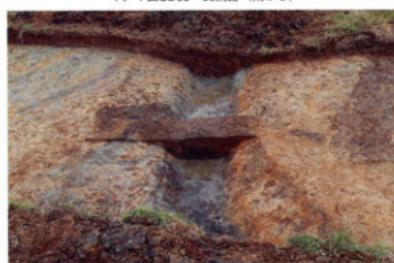
I区：SX08、II区：SX11、IV区：SK14  
V区：SX40・SK44



1. I区SD05・06溝跡（南から）



2. I区SD05・07溝跡（南から）



3. IV区SD05溝跡（西から）



4. IV区SD15～17溝跡（東南から）



5. III区南側全景（西から）



6. III区西侧柱穴群（西から）



7. III区南側（南から）



8. III区SD20溝跡（西から）

図版9 中世、近世・近代以降、その他の遺構  
I区：SD05・07溝跡、III区：SD20溝跡ほか、  
IV区：SD15～17溝跡



1～14：SD12方形周溝跡

1・2：土師器器台 3～7・9：土師器鉢 10・11：土師器壺  
12：土師器有孔鉢 8・13・14：土師器壺

S=1/3 ( )は図No.

図版10 古墳時代前期の遺物（1）



1 ~ 5 : SD12方形周溝跡    6 : SD02溝跡    7 ~ 9 : SD09溝跡

1 ~ 5 : 土師器壺    6 ~ 7 : 土師器器台    8 ~ 9 : 土師器蓋

S=1/3 ( ) は図No.

図版11 古墳時代前期の遺物 (2)



1~6 : SD09溝跡 7~10 : SX08湿地

1・10 : 土師器壺 2~5 : 土師器甌  
7 : 土師器器台 8・9 : 土師器鉢 6 : 土師器台付甌  
S=1/3 ( )は図No.

図版12 古墳時代前期の遺物 (3)



図版13 古墳時代前期(4)、中世・近世、縄文時代の遺物

## 報告書抄録

ふりがな	なりたいせき					
書名	成田遺跡					
副書名						
卷次						
シリーズ名	美里町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第4集					
編著者名	岩潤章 佐久間光平					
編集機関	美里町教育委員会					
所在地	〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13 TEL 0229-33-2175					
発行年月日	西暦2008年3月25日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間 面積 原因
成田遺跡	宮城県遠田郡 美里町 中坪字成田	045055	39051	38度 35分 18秒	141度 0分 23秒	2005.10.31 ~11.02 2006.08.28 ~11.21 700m <sup>2</sup> 2,800m <sup>2</sup> 県営は場 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
成田遺跡	集落跡	古墳前期 中世 近世	方形周溝跡 1 溝跡 3 濡地跡 溝跡 3 人溝跡 1 掘立柱建物群 井戸跡	土師器 土玉 磨石 中世陶器 磨石 近世陶磁器 石鉢 寛永通宝	古墳時代前期の方形周溝 跡や溝跡から塙釜式土器 が多数出土。	
要約	<p>成田遺跡は宮城県北部の美里町中坪地区に所在し、江合川流域の自然堤防上にある。県営は場整備事業に伴い発掘調査を行った結果、古墳時代前期の方形周溝跡、溝跡、土坑、湿地などを検出した。方形周溝跡からは前期塙釜式土器がやまとまって出土した。この遺構はその性格として「方形周溝墓」の可能性が考えられる。</p> <p>ほかに、中世の溝跡や近世・近代以降の屋敷跡と推定される遺構群が検出された。</p>					

---

美里町文化財調査報告書第4集

## 成田 遺 跡

平成20年3月21日印刷  
平成20年3月25日発行

発行 美里町教育委員会  
宮城県遠山郡美里町北浦字胸米13  
印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市青葉区立町24-24

---

